岩手県埋文センター文化財調査報告書第43集

寒風遺跡発掘調査報告書

国道283号線道路改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター
岩　手　県　土　木　部

序

本県には数多くの遺跡が存在しております。昭和55年度末における埋蔵文化財包蔵地は4,719ヶ所が遺跡台帳に登載されております。

文化財は私たちの祖先が長い歴史のなかで創造し、現在に伝えてきた貴重な財産であります。この文化遺産を保護、保存し、次の世代に引継いでいくと共に、文化財を活用することによって私たち自身もこの文化財に学び新たな文化創造への基礎とすることが重要な課題であると思います。

この貴重な文化遺産の保存と、現代生活を豊かにするという開発指向との均衡を保つため県教委文化課と開発事業者間でその調整について努力しているところでありますが、止むを得ず破壊される遺跡については記録保存の措置をとることとしております。

当センターでは昭和52年発足以来、埋蔵文化財保護の立場に立って発掘調査に取り組んでまいりました。本年度は新たに資料課を設置し、調査と同時に、資料整備、普及活動、報告書の刊行等を進めてまいりました。

本報告書は一般国道283号線の改良工事に関連し、本年度調査した遠野市寒風遺跡の調査結果をまとめたものです。今回の調査で特に縄文時代早期から前期にかかわる遺物の発見、一部破壊されてはいますが、近年県内各地で発見されている円形周溝といわれている遺構の発見、また近世に位置づけられる民家跡の発見等、埋蔵文化財の発掘調査例の少ない遠野地方にとって新たな資料を提供できたと思っております。この報告書がいささかでも関係各位の参考となり、斯学向上の一助となれば幸いです。

最後にこれまでの発掘調査や報告書刊行にご協力、ご援助賜わりました、県教育委員会文化課、県土木部をはじめ地元関係各位に心から感謝すると共に、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和57年3月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

理事長　新里　盈

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	新里　盈	(県教育長)
副理事長	中原良一	(県教育次長)
常務理事	菅原一郎	(県立埋蔵文化財センター所長)
理事	吉田良和	(県農政部次長)
〃	田代太志	(県林業水産部次長)
〃	後藤光雄	(県土木部次長)
〃	板橋　源	(県立博物館長・岩手大学名誉教授)
〃	草間俊一	(県立盛岡短期大学長)
〃	小形信夫	(前常務理事)
監事	白石丈雄	(県教委総務課長)
〃	及川久男	(県教委財務課長)

職員

所長	菅原一郎	専門調査員	田鎖寿夫
副所長	小野寺　登	〃	佐々木嘉直
		〃	栃沢満郎
総務課長	小笠原喜一	〃	平井　進
庶務係長	岡沢成治	〃	種市　進
主事	佐藤久四郎	〃	鈴木隆英
〃	戸草内幸男	〃	三浦謙一
〃	立花多加志	〃	岩渕　久
技能員	佐藤春男	〃	光井文行
		〃	佐藤　勝
調査課長	嶋　千秋	〃	高橋義介
主任専門調査員	近藤宗光	〃	佐々木清文
〃	遠藤勝博	〃	酒井宗孝
〃	国生　尚	資料課長	瀬川司男
専門調査員	村上達夫	専門調査員	高橋与右エ門
〃	畠山靖彦	〃	本沢慎輔
〃	朝野孝二	〃	高橋文夫
〃	菊池利和	〃	工藤利幸
〃	鈴木恵治	〃	四井謙吉
〃	小平忠孝	〃	中川重紀
〃	大原一則	〃	松野恒夫

緒　　言

1．この報告書は岩手県遠野市綾織町新里第８地割字寒風野に所在する寒風遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．この調査は国道 283 号線道路改良工事に伴う緊急事前調査である。調査については岩手県土木部の依頼により、岩手県教育委員会文化課が調査方法等について協議を重ね、その調整の結果埋文センターが県土木部と契約を締結し、発掘調査を行なった。

3．発掘調査は昭和56年４月16日から６月30日まで行なった。

4．発掘面積は10,500㎡で、そのうち寒風遺跡は8,100㎡、宮野目地区2,400㎡である。なお宮野目地区の調査区域からは遺構、遺物とも検出できなかった。

5．調査と整理には近藤宗光、畠山靖彦、朝野孝二があたった。

6．検出された遺構は次の通りである。

竪穴住居址遺構　３棟	ピット　２基	馬蹄形周溝　１基
陥し穴状遺構　３基	焼土ピット　３基	掘立柱建物跡　１棟

7．発掘調査にあたって、遠野市教育委員会、遠野土木事務所の御協力を賜わった。

8．この報告書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ．調査に至る経過　　嶋千秋

Ⅱ．調査方法と整理方法　　畠山靖彦

Ⅲ．遺跡の立地と環境　　畠山靖彦

Ⅳ．検出された遺構と遺物

　１．遺構　(1)～(5)　　畠山靖彦

　　(6)　　朝野孝二

　２．遺物　　畠山靖彦

Ⅴ．おわりに　　畠山靖彦

9．土層と土器の色調については「新版標準土色帳」（農林省農林水産技術会議事務局監修）を利用した。

10．石質鑑定は岩手県立大船渡農業高校教諭佐藤二郎氏が行なった。

11．野外調査にあたっては、安部正志氏他遠野市綾織地区の作業員多数の協力を得た。

12．室内整理、図版作成にあたっては、当センター作業員の協力を得た。

目　　次

序……i
緒言……Ⅲ
Ⅰ．調査に至る経過……3
Ⅱ．調査方法と整理方法……4
Ⅲ．遺跡の立地と環境……6
Ⅳ．検出された遺構と遺物……8
1．遺構……8
(1) 竪穴住居址状遺構……8
(a) B・10竪穴住居址状遺構……8
(b) C・140—1竪穴住居址状遺構…8
(c) C・140—2竪穴住居址状遺構…8
(2) ピット……9
(a) B・20ピット……9
(b) C・130ピット……9
(3) C・110馬蹄形周溝……9
(4) 陥し穴状遺構……10
(a) A・10—1陥し穴状遺構……10
(b) A・10—2陥し穴状遺構……10
(c) C・330陥し穴状遺構……10
(5) 焼土ピット……10
(a) C・190焼土ピット……10
(b) C・310焼土ピット……11
(c) D・390焼土ピット……11
(6) A・10掘立柱建物跡……11
2．遺物……33
(1) 土器……33
(2) 石器……36
(3) 銭貨……39
(4) 鉄製品……39
(5) 鉄滓……39
Ⅴ．おわりに……52

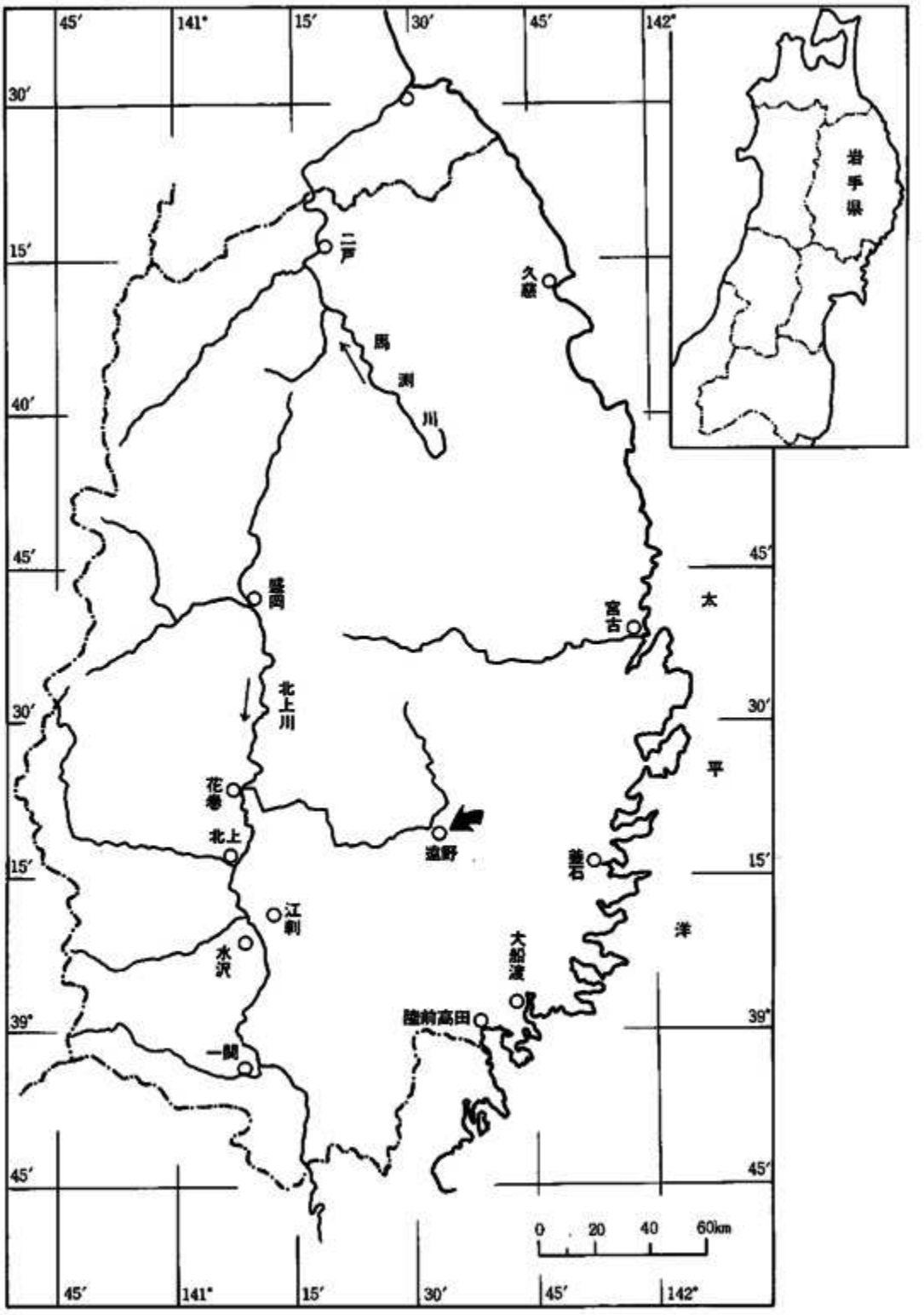
図　版　目　次

図版1　岩手県全体図……1
図版2　遺跡位置図……2
図版3　遺構配置図(1)……17、18
図版4　遺構配置図(2)……19、20
図版5　B・10竪穴住居址状遺構……21
図版6　C・140—1竪穴住居址状遺構……22
図版6　C・140—2竪穴住居址状遺構……22
図版6　B・20ピット……22
図版6　C・130ピット……22
図版7　C・110馬蹄形周溝……23
図版8　A・10—1陥し穴状遺構……24
図版8　A・10—2陥し穴状遺構……24
図版8　C・330陥し穴状遺構……24
図版9　C・190焼土ピット……25
図版9　C・310焼土ピット……25
図版9　D・390焼土ピット……25
図版10　A・10掘立柱建物跡……26
図版11　縄文土器片(①～㉛)……40

図版12　縄文土器片(㊷～㊾)……41
図版13　土師器片・陶器片(㊿～(70))……42
図版14　石器((71)～(84))……43
図版15　石器(85～96)……44
図版16　銭貨・鉄製品(97～(114))……45

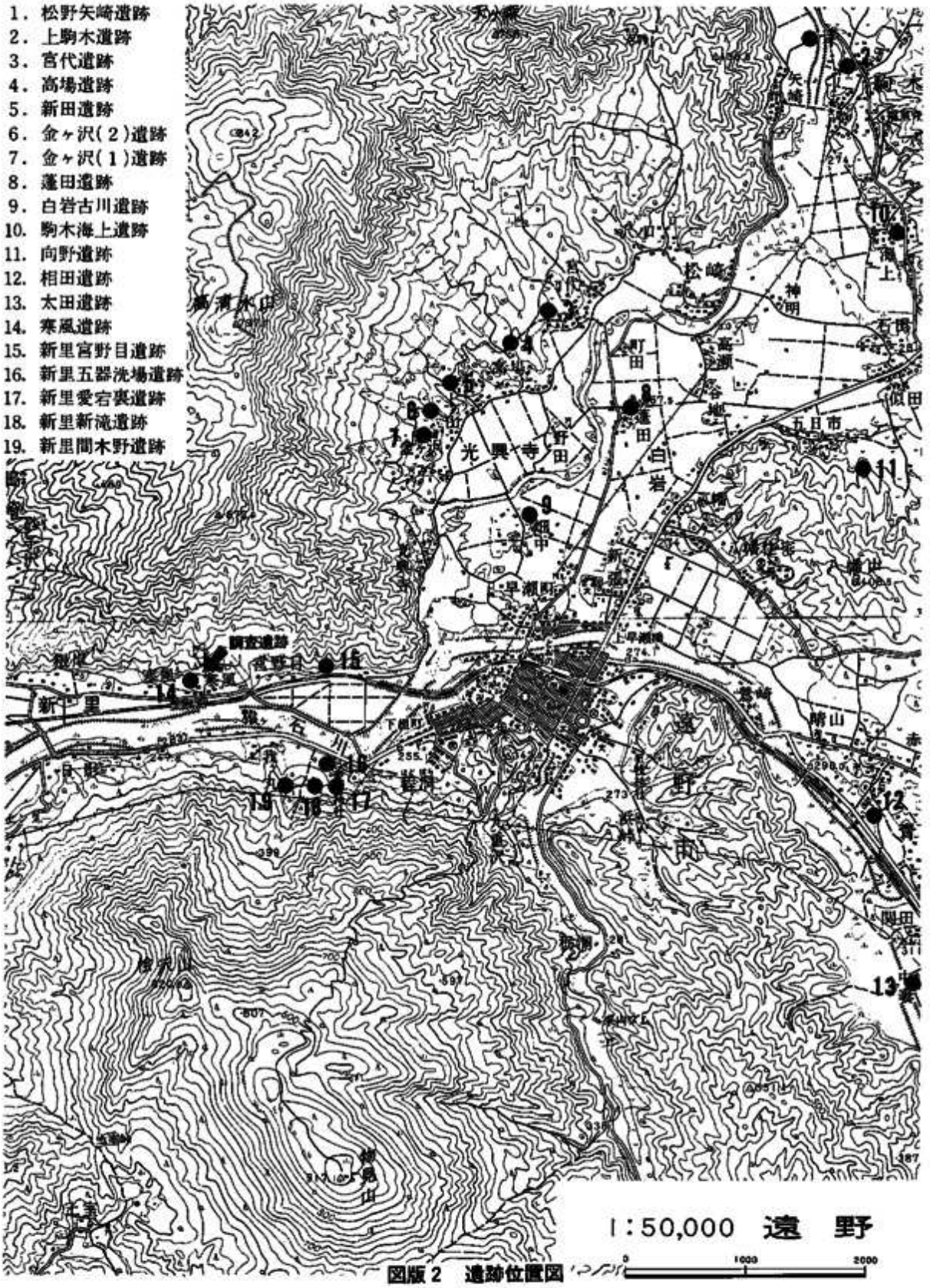
写真図版目次

図版 1　遺跡全景……27
図版 1　B・10竪穴住居址状遺構……27
図版 1　C・140―1竪穴住居址状遺構……27
図版 1　C・140―2竪穴住居址状遺構……27
図版 2　B・20ピット……28
図版 2　C・130ピット……28
図版 2　C・110馬蹄形周溝……28
図版 3　C・110馬蹄形周溝……29
図版 3　A・10―1陥し穴状遺構……29
図版 3　A・10―2陥し穴状遺構……29
図版 4　C・330陥し穴状遺構……30
図版 4　C・190焼土ピット……30
図版 4　C・310焼土ピット……30
図版 5　A・10掘立柱建物跡……31・32
図版 6　縄文土器片(①～㉑)……46
図版 7　縄文土器片(㉑～㊷)……47
図版 8　縄文土器片・土師器片(㊸～㊿)…48
図版 9　陶器片・石器((51)～(84))……49
図版10　石器・銭貨(85～99)……50
図版11　鉄製品・鉄滓((100)～(120))……51


45′
141°
15′
30′
45′
142°
30′
15′
40′
45′
30′
15′
39°
45′
二戸
久慈
馬淵川
盛岡
宮古
北上川
花巻
北上
遠野
釜石
江刺
水沢
大船渡
陸前高田
一関
太平洋
岩手県
0 20 40 60km

図版1　岩手県全体図

1．松野矢崎遺跡
2．上駒木遺跡
3．宮代遺跡
4．高場遺跡
5．新田遺跡
6．金ヶ沢（２）遺跡
7．金ヶ沢（１）遺跡
8．蓬田遺跡
9．白岩古川遺跡
10．駒木海上遺跡
11．向野遺跡
12．相田遺跡
13．太田遺跡
14．寒風遺跡
15．新里宮野目遺跡
16．新里五器洗場遺跡
17．新里愛宕裏遺跡
18．新里新滝遺跡
19．新里間木野遺跡



図版２　遺跡位置図

Ⅰ．調査に至る経過

遠野市は三陸沿岸の工業都市である釜石市と内陸部の花巻市、盛岡市等を結ぶ交通の要所となっており、特に釜石市が石油備蓄基地としての機能をもつに至って益々交通需要の増大がみられ、城下町としての性格を有する市街地にとって交通緩和が地域課題となっている。

この問題の解決策としての一般国道283号線の改良工事としての遠野バイパス建設が昭和49年に計画され、遠野市綾織町日影から遠野市青笹駅口までの工事延長約10km区間がルートとなっており、昭和55年度には第1期工事区間の用地取得が完了し一部工事が施行されている。

昭和55年12月県教委文化課において遠野市綾織地区の遺跡分布調査が行なわれ、綾織町寒風地区及び宮野目地区におけるルート内約20,000㎡の範囲に遺物の散布地が発見された。

その後、県土木部道路建設課、遠野土木事務所と文化課との間で、事業実施計画と埋蔵文化財の取り扱いについて協議が重ねられた。

昭和56年4月8日県土木部道路建設課、遠野土木事務所、県教委文化課、(財)岩手県埋蔵文化財センターの四者により、現地立ち会いのうえ次のことを協議した。

(1) 発掘調査は(財)岩手県埋蔵文化財センターが4月16日から実施する。

(2) 調査方法は、試掘、粗掘調査とする。

(3) 調査期間は4月～6月の期間とする。

(4) 調査対象面積は、14,400㎡とする。

(5) 委託契約の内容は粗掘調査とする。

(6) 粗掘、遺構検出の結果によって、その後の調査計画や契約の方法について別途協議する。

発掘調査は4月16日から開始され、粗掘が進行するなかで、寒風遺跡について調査対象面積は、8,100㎡に限定されることや、当初予想より、検出遺構、遺物が少ないこと等から、当初契約における調査期間、調査費の範囲内で精査まで継続調査し、調査結果の整理作業と報告書刊行分については、別途協議の上契約を締結し昭和56年内で全て完了することとした。

Ⅱ．調査方法と整理方法

1．調査方法

(1) 調査区の設定

調査区域が東西方向に長く、間に鉄道や道路があることもあり、鉄道の西をⅠ区、鉄道の東の斜面をⅡ区、丘陵部をⅢ区、Ⅳ区と分けた。

基準点1(X－74.486m 12・Y＋57.589m 25、標高255m 495)と基準点2(X－74.407m 28・Y＋57.681m72、標高265m 571)を結んで中軸線とし、東西に延長した。基準点Ⅰより西へ33m延長した点を0とし、そこから東にむかって10m毎に10、20、30…とした。Ⅰ区は0～100、Ⅱ区は100～270、Ⅲ区は270～370、Ⅳ区は370～470である。0点で中軸線に直交する基準線を設定し、10m毎に北よりA、B、C、D、Eとし(Aより北の場合はZからさかのぼる)、両者の組合わせによって大区画とした(0点はDである)。大区画を必要により、西より東へ1m毎に0、1、2…9とし、北より南へ1m毎にa、b、c…jとし、両者の組み合わせによって小区画を設定した。基準点1はD33、基準点2はD 155である。Ⅰ、Ⅱ区の中軸線は磁北に対して58°東偏している。

Ⅲ区は基準点3(X－74 333m03・Y＋57.768m 73、標高277m 544)でⅠ、Ⅱ区の中軸線より30°の角度で南方向に曲げ、Ⅰ、Ⅱ区と同じ要領でD370まで設定した。基準点3はD270である。このⅢ区中軸線は磁北に対して88°東偏している。Ⅳ区はさらに基準点4(X－74.314m92・Y＋57.867m04、標高278m 595)でⅢ区中軸線より4°の角度で南方向に曲げ、Ⅰ、Ⅱ区と同じ要領でD470まで設定した。基準点4はD370である。このⅣ区の中軸線は磁北に対して92°東偏している。

(2) 遺構名

検出された遺構は、検出された区名に遺構の種類を付して表わした。

(3) 粗掘

任意の数箇所を3m方形で試掘し、遺構の検出面を把握した後、バックホーで中軸線の両側を1m残し、6m幅の表土除去を行なった。表土除去を行った範囲から遺構が検出されなかった場合は、土捨て場として利用し、順次発掘を進行していった。

(4) 精査

住居址状の遺構は4分法、ピット類は2分法を原則とした。

(5) 実測

平面図、断面図は20分の1の縮尺で図面を作成した。平面図の測量は遣り方測量を原則とした。

2．整理方法

報告書作成にあたって留意した点および作業の要点を示した。

(1) 本文の記述

発掘の過程で遺跡から得た情報を基に、フィールドカードに集積したものを３名の調査員で随時情報交換し、協議しながら２名の調査員で記述した。

(2) 遺構図

a．遺構配置図は、野外発掘調査の際に作成した平面図を基にして 1,000分の１の縮尺で作成したものと 100分の１ の縮尺で作成したものとある。

b．各遺構図は野外発掘調査に作成した図面をトレースし、それにスケールを付して、竪穴住居址状遺構は30分の１と40分の１、ピットは40分の１、陥し穴状遺構は30分の１、掘立柱建物跡は90分の１でのせた。

図中の記号、スクリーントーンは次のように表わした。

G…礫　　P_1P_2…P_n…柱穴　　地山…　　焼土…

(3) 出土遺物

a．土器

① 縄文式土器：完形品の出土は皆無である。口縁部および底部の出土は数点であり、出土した土器片の殆んどは胴部である。代表的な土器片は拓影と写真で載せ、縁部と底部については実測図と写真を載せた。

② 土師器：底部だけの出土である。出土したもの全て拓影と写真で載せた。

b．石器：器種毎に分類し、実測図と写真を載せた。

c．銭貨：拓影と写真を載せた。

d．鉄滓：写真を載せた。

Ⅲ. 遺跡の立地と環境

(1) 立地

本遺跡は遠野市綾織町新里第８地割字寒風野に所在し、国鉄釜石線遠野駅西方約３kmの地点にある。

遠野盆地は北上山地中南部にあり、東に六角牛山(標高1,294.3m)、西に高清水山(797.7m)、南に物見山(917.1m)、北に天ヶ森(756.1m)をはじめ北上山地を構成するなだらかな山々があり、その奥に早池峰山(1,914m)がある。薬師岳(1,644.9m)に源を発する猿ヶ石川は途中で小烏瀬川を併せて南流し、遠野盆地で早瀬川と来内川を合流し、流路を西に変え盆地を抜けだす。

その地点は北に高清水山、南に物見山の山麓が張り出した狭隘部になっており、本遺跡はその高清水山の南むきの山麓緩斜面(崖錐性扇状地)に位置している。５万分の１の地形図でその位置を測定すると北緯39°19′40″、東経141°30′10″になる。

調査地域は南西から東に細長く、平面直角座標第10系におけるX－74,314m 92～74,486m 12、Y＋57,589m 25～57,867m 04をふくむ範囲にあり、その範囲の標高は南西側約254m、東側約280mである。猿ヶ石川との比高は南西側で約10m、東側で約35mである。

調査区域の地質は中世層白亜系花崗岩質で、花崗岩が露呈している。それらの花崗岩は風化され砂質化している。高清水山は広葉樹林、針葉樹林におおわれ、その裾野緩斜面は牧草地、その下の調査区域は畑に利用されている。

寒風野の地名に由来するかのように、猿ヶ石川の谷沿いに張り出す形になっているこの調査区域を終日西風が吹き、午後から強さを増し、梅雨期でも冷気を感じるほどである。そのため土壌の風化と移動がはげしく、場所によっては表土がうすく、あるいは表土が失われている所もある。

寒風遺跡の基本土層は場所により若干の相違はあるが、基本的には以下のような層序で構成されている。サンプリングした場所はⅠ区東端である。

基本層序

Ⅰ層　黒褐色土(10YR 3/2)層厚は10cm～15cmで上面は耕作土、風化花崗岩の細粒が認められる。

Ⅱ層　黒色土(10YR 1.7/1)層厚８cm～10cmで、湿気を多少ふくんでいる。

Ⅲ層　黒褐色土(10YR 3/2)と褐色土(10YR 5/6)の混合で、層厚は10cm～15cmである。

Ⅳ層　黒褐色土(10YR 3/2)花崗質礫層をふくみ、層厚は12cm～16cmである。

Ⅴ層　地山

検出面はⅠ層下面からⅡ層上面である。

(2) 周辺の遺跡

本遺跡の周辺の遺跡は、岩手県教育委員会がまとめた岩手県遺跡基本図（1980）によれば、高清水山東方の扇状地、狼ヶ石川の北西部に松崎矢崎遺跡、上駒木遺跡、宮代遺跡、高場遺跡、新田遺跡、金ヶ沢(2)遺跡、金ヶ沢(1)遺跡があり、その東方狼ヶ石川河岸近くの平野には蓬田遺跡、白岩古川遺跡がある。また上駒木遺跡南東、耳切山の裾野には駒木海上遺跡が、その南、八幡山の裾野には向野遺跡がある。また早瀬川流域の南東には相田遺跡、太田遺跡と並ぶ。さらに市街地西側の高清水と物見山にはさまれている狼ヶ石川流域には新里五器洗場遺跡、新里愛宕裏遺跡、新里新滝遺跡、新里間木野遺跡、河川北側には新里宮野目遺跡、その西に寒風遺跡がある。いずれも縄文時代の遺跡とされている。

このように図版２に表わした範囲の遺跡だけでも多数にのぼるが、遠野地方の発掘調査は昭和43年に坂の上遺跡、45年に深沢遺跡が行われた程度である。これ等はいずれも縄文時代の遺跡である。その他に附馬牛町にある中世寺院、東禅寺の伽藍配置の調査や遠野南部氏の居城鍋倉城の一部発掘調査を散見する程度である。

Ⅳ. 検出された遺構と遺物

1．遺構

(1) 竪穴住居址状遺構

（a）B・10竪穴住居址状遺構（図版5・写真図版1）

調査区域南西B・10区で検出されたものである。やゝ楕円形の形状を示し、規模は径約370cm×320cmを測る。埋土は暗褐色土に褐色、風化花崗岩粒が微量混入する単層である。壁高は北壁約15cm、東壁約5cmで、南壁、西壁にあたる部分は壁高は殆んど認められず、きわめて緩かに傾斜している。床面は凹凸がなく、褐色土に風化花崗岩粒をふくみ、きわめて硬くしまっている。柱穴、炉、カマドとも検出されないし、埋土および床面からの出土遺物はない。従って竪穴住居址状遺構とした。

（b）C・140—1竪穴住居址状遺構（図版6・写真図版1）

調査区域の中央西よりの緩斜面C・140区で検出されたものである。東側はC・140—2竪穴住居址状遺構と切り合っており、東壁は不明である。したがって形状ははっきりしないが隅丸方形であると思われる。規模は切り合い部分まで東西方向に約200cm、南北方向に約335cmである。

埋土は暗褐色土に褐色ブロックをふくむ層、明褐色土層を中心に構成される。特に北壁際には風化花崗岩粒混入の明褐色土が流れ込んだように堆積し、径約10cm～60cmの風化花崗岩10数個が不規則に存在する。さらにそれら礫の間にうすい焼土も認められたが、現地性のものかどうかは不明である。炉跡やカマドとは見られない。壁高は西側で約20cm、東側はC・140—2竪穴住居址状遺構に切り合っておち込んでいる。

床面はわずかに凹凸があるものの、ほぼ平担でやゝしまりがあり、貼り床状のものである。柱穴、炉、カマドは検出されないし、出土遺物もない。従って竪穴住居址状遺構とした。

西側にはC・130ピットがあり、埋土の状態から同時期のものと思われるが、この遺構との関連は不明である。なお西側壁の外側から石器(図版14の㉖・写真図版9の㉖)が出土している。

（c）C・140—2竪穴住居址状遺構（図版6・写真図版1）

C・140—1竪穴住居址状遺構の東に接しているものである。西側はC・140—1竪穴住居址状遺構と切り合っており、西壁は不明である。形状は隅丸方形であると思われる。規模は東西方向で約330cm、南北方向で約290cmである。壁高は北壁で約35cm、南壁で約20cm、東壁で約25cmである。

C・140－1遺構と切り合っている所には粒径約15cm～25cmの礫が数個不規則に存在する。

埋土は暗褐色土層、風化花崗岩粒混入の明褐色土層を中心に構成され、床面には粒径約5cm～20cmの礫が散在しているが、貼り床状を呈し、凹凸があり、やゝしまっている。柱穴、炉、カマドなどは検出されないし、埋土および床面からの出土遺物もない。従って竪穴住居址状遺構とした。

遺構の東側近くを北西にはしる埋没谷の黒褐色土層から土器片（図版11の①～⑫、㊵、㊷・写真図版6の①～⑫、㊵、㊷）が出土している。

(2) ピット

(a) B・20ピット（図版6・写真図版2）

B・10竪穴住居址状遺構のすぐ東端に検出されたものである。平面形は円形、断面形は皿状を呈し、規模は開口部径約72cm×77cm、底部径約67cm×65cm、深さ約18cmのもので、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。埋土は明褐色土層を中心に構成されている。床面はきわめて硬く平担である。B・10竪穴住居址状遺構の付属施設であるかどうかは不明である。埋土および床面からの出土遺物はない。

(b) C・130ピット（図版6・写真図版2）

C・140－1竪穴住居址状遺構のすぐ西端に検出されたものである。形状は平面形が不整の円形、断面形は皿状を呈し、規模は開口部径約226cm×225cm、底部径約152cm×116cm、深さは約18cmである。

北壁は約8cm、南壁は約10cmで南壁はなだらかにたちあがっている。埋土は暗褐色土の単層であるが、上面にむかって明褐色土の混入がわずかに多くなる。北壁には木根痕らしいものが半円状にある。床面は北壁部分に凹凸があるが、平担でしまっている。C・140－1竪穴住居址状遺構の付属施設であるかどうかは不明である。埋土および床面からの出土遺物はない。

(3) C・110馬蹄形周溝（図版7・写真図版2、3）

調査区域の西寄り緩斜面C・110区で検出されたものである。ほぼ南半分は私道のため切られて消失している。残存しているところからみて、平面形は馬蹄形であると思われる。規模は長軸で約800cm、短軸は切られて不明である。溝の規模は西側で上幅約80cm、下幅約63cm、深さ約5cm、北西側で上幅約80cm、下幅50cm、深さ12cm、北側で上幅約100cm、下幅約70cm、深さ約7cm、東側で上幅約98cm、下幅約50cm、深さ約10cmであり、断面形は全て浅皿状を呈する。

埋土は黒褐色土層、褐色土層、橙色土層から構成されて、ややしまっている。埋土および床

面からの出土遺物はないが、周溝の南西部分より土師器片（図版13の㊷・写真図版８の㊷）が出土している。

(4) 陥し穴状遺構

(a) A・10－１陥し穴状遺構（図版８・写真図版３）

調査区域のA・10区掘立柱建物跡の南側で検出されたものである。形状は平面形で溝状を、断面形でY字状を呈する。規模は開口部で長さ約317cm、幅約52cm、底部での長さ約293cm、幅約８cm、深さ約85cmである。埋土は黒褐色土層、花崗岩粒をふくむ明褐色土層である。埋土および床面からの出土遺物はない。

(b) A・10－２陥し穴状遺構（図版８・写真図版３）

調査区域の西A・10区の掘立柱建物跡の南側に接して検出されたものである。A・10－１陥し穴状遺構から北東方向に約250cm離れた地点にある。形状は平面形が溝状を呈し、断面形はY字状を呈する。規模は開口部での長さ約346cm、幅40cm、底部での長さ約310cm、幅約７cm、深さ90cmである。埋土は黒褐色土層、暗褐色土層、明褐色土層に大別される。明褐色土層、暗褐色土層には風化花崗岩粒が混入している。埋土および床面からの出土遺物はない。

(c) C・330陥し穴状遺構（図版８・写真図版４）

調査区域丘陵地C・330区で検出されたものである。形状は平面形が溝状を呈し、断面形はY字状を呈する。規模は開口部の長さ約285cm、幅約70cm、底部での長さ約238cm、幅23cm、深さ83cmである。埋土は明褐色土層、暗褐色土層、橙色土層、黒褐色土層に大別され、暗褐色土層には風化花崗岩粒が相当に混入されている。埋土および床面からの出土遺物はない。

(5) 焼土ピット

(a) C・190焼土ピット（図版９・写真図版４）

調査区域の中央西寄りの緩斜面C・190区で検出されたものである。北側が農道のため調査をしなかったので平面形は不明であるが円形を呈するものと思われる。断面形はビーカー状を呈す。

規模は開口部径約330cm、底部径約220cm、深さ約50cmである。埋土は暗褐色土層、明褐色土層、褐色土層に大別される。焼土はピット北側道路際の地山面にのり、断面での高さ約15cm、幅約58cmである。塊になっており、他の混入物もほとんどなく、焼土をかこむ明褐色土層は硬くしまり、焼成の痕跡もみられ、地山面に載ることから現地性の焼土ではないかと思われる。

埋土および床面からの出土遺物はない。

（b）C・310焼土ピット（図版９・写真図版４）

調査区域の丘陵地C・310区で検出されたものである。平面形は円形を呈し、断面形はビーカー状を呈する。規模は開口部で南北方向に径約213cm、東西方向に径約218cm、底部は南北方向に径約140cm、東西方向に径145cm、深さ約75cmである。埋土は暗褐色土の単層である。

深さ約45cm、径約65cm×45cmの不整の円形を成している焼土を含む塊がピットの南壁近くにある。焼土はその上面にのり径約65cm×45cm、高さ約15cmで、その下層にうすい繊維状の炭化物の層と暗褐色土層があり、その下層も同じ層序である。底面は生焼けの炭化物の薄い層である。焼土の上面より角釘２本（図版16の⑲、⑳・写真図版11の⑲、⑳）出土しているし、層序の構成から比較的新しい現地性の焼土であると思われる。

（c）D・390焼土ピット（図版９）

調査区東側丘陵部のD・390区で検出されたものである。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈し、規模は開口部径約152cm×105cm、底部径約130cm×55cm、深さ約20cmである。埋土は褐色土層、橙色土層、明褐色土層に大別される。焼土は褐色土層上面にのり、平面的な広がりをもつものと思われたが、断面を切ってみると、３ヶ所に高さ約２cm～４cmの焼土がブロック状を成していた。その事から比較的新しい現地性の焼土と思われる。埋土・床面からの出土遺物はない。

(6) 掘立柱建物跡

A・10掘立柱建物跡（図版10・写真図版５）

掘立柱建物跡が検出された位置は調査区域の南西Ⅰ区の北側で、Z10～20区、A10～20区である。この地域は現在耕作地になっており、北から南にかけてゆるやかな傾斜になっている。

この建物跡より南へ40mほどで急峻な崖となり直下を猿ヶ石川が西流する。この周辺では花崗岩の礫塊がいたる所に露出又は埋没しており、この建物跡のまわりにも多くみられる。

（a）柱穴のつくり（柱穴一覧表参照）

検出された柱穴数は92個を数え、柱穴平面形は、円ないし楕円形である。柱穴の断面を分類すると、皿状の柱穴はNo.１、10、14、17、19、25、26、27、29、33、34、35、38、42、44、47、64、80、81の19個であり、比較的深く、断面がU字形の柱穴はNo.２、３、４、12、13、15、18、20、21、22、23、28、30、31、37、39、46、54、55、57、59、61、63、69、72、73、74、76、77、78、79、83、84、85、86、87、88、89、90の39個を数える。

埋土は総体的に黒褐色土又は暗褐色土がベースで褐色土がまだらに混合するパターンであり、全般に花崗岩の風化礫が混入している状態である。不完全であるが柱あたりが検出された柱穴はNo.２、３、４、20、28、31、55、57、59、62、83であり、痕跡のわかるものでは、柱あたりの直径は約15cm前後の円形である。柱穴底部に平らな面を上にした礎石と思われる花崗岩の自然石が検出さ

れたのはNo.5 ,28、42、44、62、65である。また柱補強のため使用されたと思われる礫が埋没していた柱穴は、No.4 、6 、7 ,21、22、23、30、42、44、46、52、61、78、83、84、85、90である。

平面プラン確認面から柱穴の底までの深さは平均約29cmであり、最も深いもので80cm、浅いものでは5cmを測る。又開口部径で小さいものはNo.16で径約20cm×29cmを測り、大きいものではNo.44の径約125cm×100cmである。

（b）構造（付図参照）

① 母屋

母屋の規模は5間×3間と考えられる。梁行方向が磁北に対して5° 東偏する程度で南面する。桁行は約10mで5間、1間は約2mである。(北側キ～ク、南側62～チ)、但し北側のキとクは柱穴を確認できず、推定である。梁行は約6mで3間と考えられるが、東側柱穴、西側柱穴とも次のような状況で確認がむずかしい。即ち、東側柱穴は、布掘り状の溝の中に設定されているが、そのすぐ東側を釜石線鉄道開通直前まで流れていたと思われる沢によって、南よりの柱穴部分が削られ失われている。又北東隅にあたる柱穴(ク)は確認出来なかったが、仮に設定されていたとすると、ク－18は0.5m、18－30は1m、30－40は1m、40－41は1mで柱穴が確認されており、東側は1mの間尺で6本の柱穴があったことも考えられる。更に、この建物跡は1棟分としては柱穴が多すぎるようでもあり、建替えがあったとすると、その柱穴とも考えられる。西側柱穴についても、北寄りの部分が沢水の氾濫かなんらかの条件によって攪乱されており、花崗岩礫が多量に流れこんだようになっていて、柱穴の確認が出来ない。確認出来たのは南寄りの3個だけで、46－48は1m、48－62は1.5mである。

母屋の北側と南側及び西側に庇と考えられる柱穴がある。北側5～11の庇は母屋より0.4m張り出し、桁行8mで4間、1間は2mと思われる。南側64～トの庇は母屋より0.6m張り出し、桁行6mで3間、1間は2mである。西側23～47の庇は柱穴が充分確認されないので、梁行は不明であるが、母屋からの張り出しは約0.5mである。尚北側の庇は布掘り状の溝に設定されている。更に母屋北側東寄りに、母屋からの張り出し1.4mの3個の柱穴を確認した。それらの柱穴間の距離は2mないし2.3mぐらいある。これも庇であるとすれば北側庇の増築・建替えも考えられる。

内部の造りについては、各柱穴間の距離、配置が一定せず、判断がむずかしいが、一応は図のように間取りを推定した。常居、茶の間、座敷などの間取りは、考えられる柱穴の並びから(37～58)×(58～55) で約3.5m×4mと(39～55)×(55～チ)で約3.5m ×2.5mの2部屋が推定される。

この2部屋以外の北側の間取りについては柱穴の並びが不自然で柱穴の数も多く、間取りを

確定することは出来なかった。

台所及び土間と考えられるところは(キ～62)×(62～58)で約6m×4mである。その中の№36は炉と考えられる。検出面から11cmの高さに厚さ2～3cmの焼土があり、焼土の範囲は34cm×24cmである。

出入口は一般に「ホラマへ」と云われる、母屋と厩の入隅64－69と64－65が考えられる。

② 厩舎

厩舎と思われる造りは、母屋の南側西寄り62～58を北側として、南へ58～78の柱穴で張り出す曲り家の部分になっている。桁行は約4mで2間であり、1間は2mである。梁行については西側が電柱の工事で攪乱されはっきりしないが、東側でみると5.3mを測り、58－69は1.65m、69－72は1.65m、72－78は2mになっている。

一般に曲り家の厩舎を決定する固められた皿状窪みや土間などは検出することが出来なかった。

（c）その他の建物（付図参照）

厩舎と思われる部分の南側にいくつかの柱穴を検出したが、その相互関係がつかめず、更にこの柱穴群のすぐ南側には、用水路跡があるなど、周辺が攪乱されていることもあって、建物を確定することは出来なかった。物置きなどの建物を想定することもできよう。

（d） 遺物（図版16の㊼～㊾）

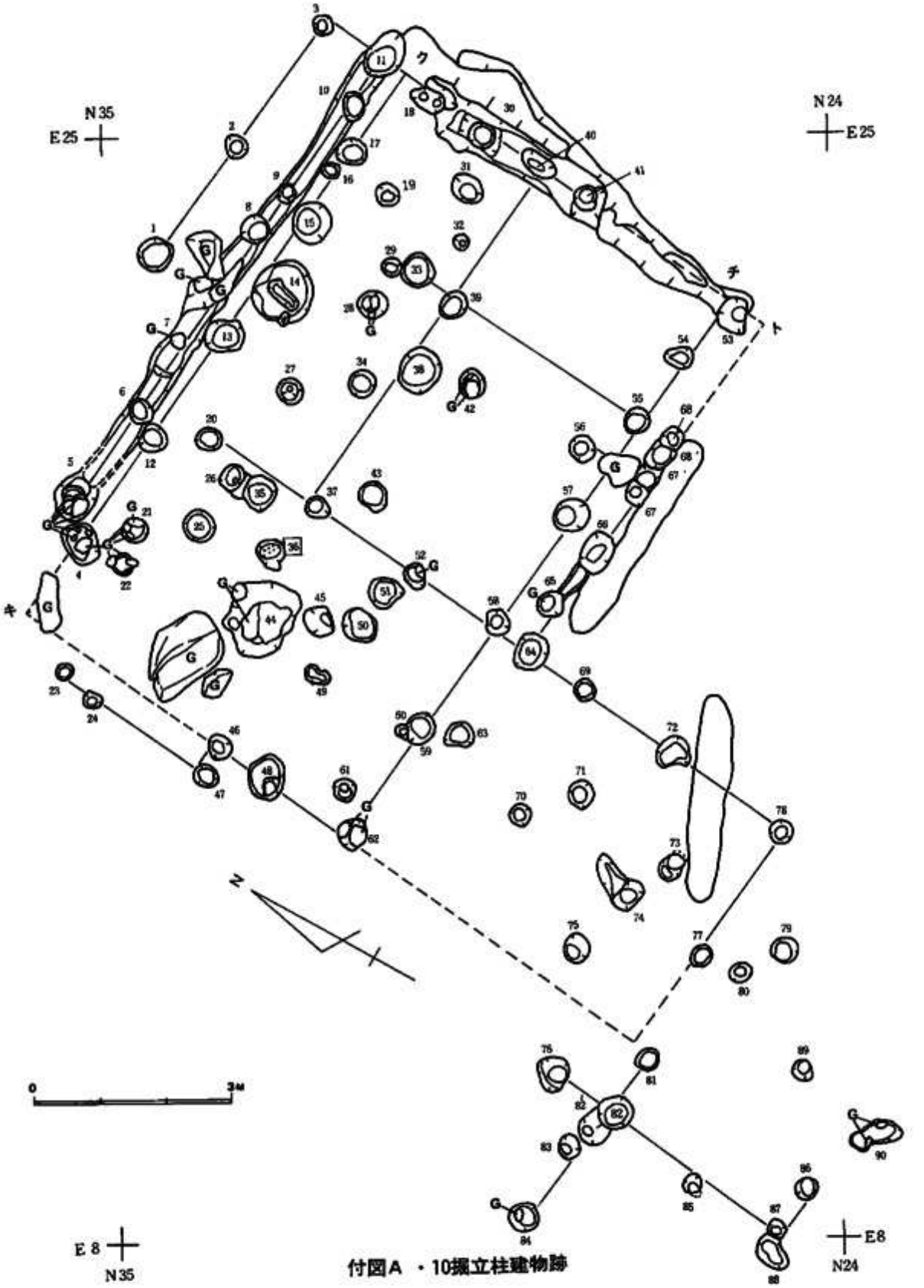
建物跡敷地周辺の耕作土から完形の永楽通宝1個、寛永通宝2個出土している。

〈まとめ〉

柱穴以外の直接的資料がないこと、北西隅付近が攪乱を受けていること、西側が電柱工事等で攪乱されていること、柱穴間のスパンや配置が一定しないことなどから、はっきりした建物を想定することは出来なかった。また柱穴が多いことから、建替えあるいは修復等があったと思われるが、そのことを確定することも出来なかった。

この建物の建立年代、内部の造り等明確にすることはさらに不可能であるが、関係すると思われる柱穴を結ぶと、前述した母屋の棟の方向を西一東に向けたと考えられる建物が考察される。この建物の柱間寸法は、6尺6寸（約2m）と考えられるが、佐藤巧氏は『岩手の古民家』の中で「柱間寸法に関しては、旧盛岡藩領域の古民家の中に6尺4寸以上の値をとる…中略……これら大きな柱間寸法をとる例がいずれも建築年代からは18世紀中期ないしそれ以前の古家にとくにみられ、18世紀後期以降と推定される遺構には全くみられないことは注目してよい」と述べており、このことから、この建物跡は18世紀中頃又はそれ以前に建設されたと考えることができる。

この掘立柱建物跡は当地域近世における一般的民家、即ち、母屋は南面して建ち、母屋の左に「うまや」の曲りの部分が突出している右構えの「内厩式曲り家」と思われる。

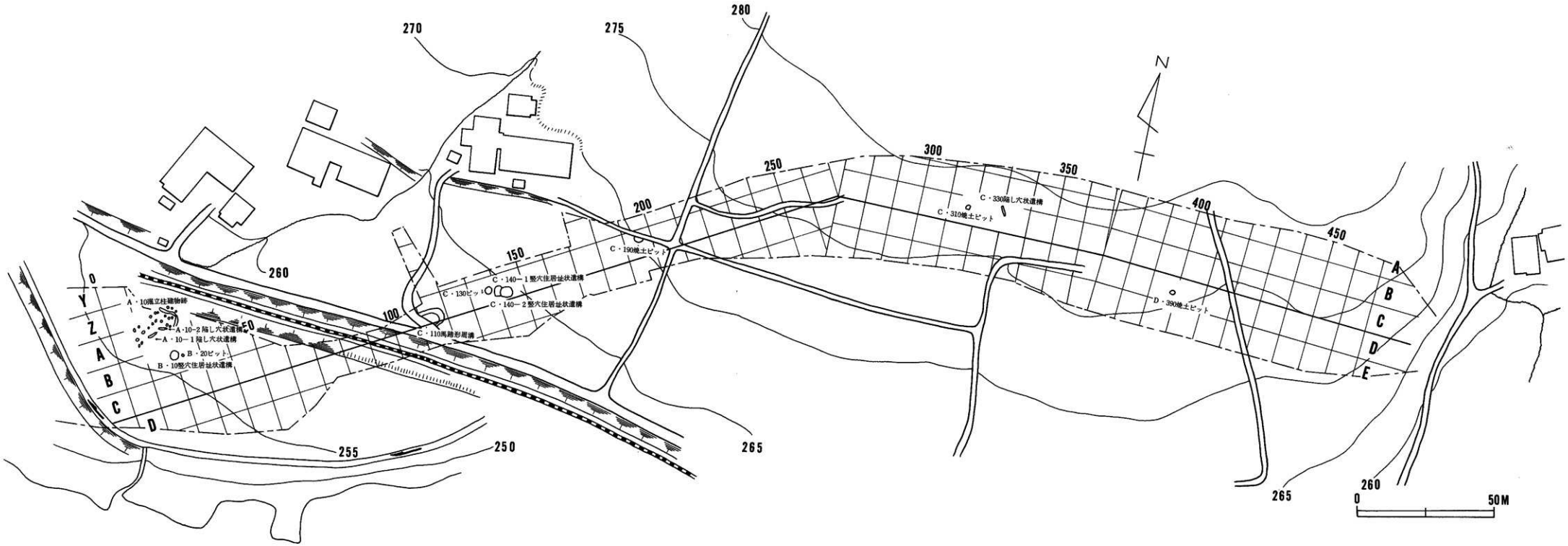


付図A ・10掘立柱建物跡

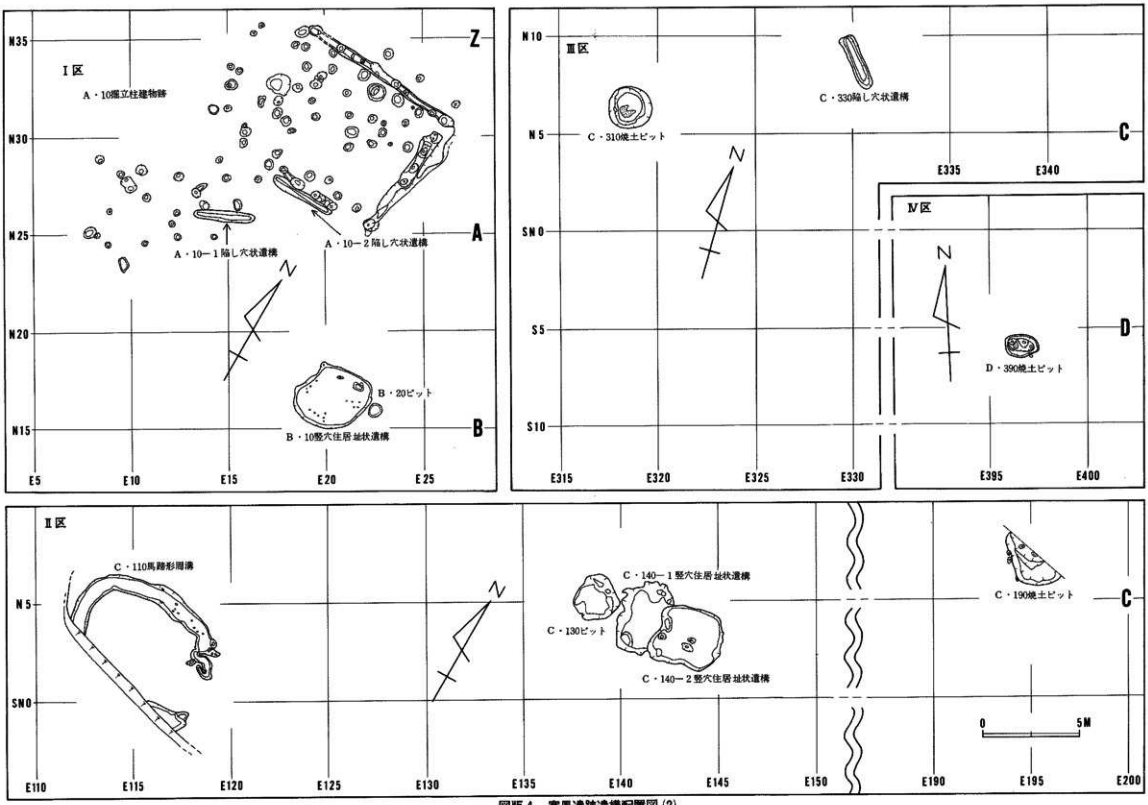
柱穴一覧表

番号	開口部径	底部径	深さ	断面形	礫	柱あたり	埋土・その他
1	54×50	43×40	20	皿状	×	不明	黒褐色土、柱穴½に褐色土混合
2	38×32	24×20	33	U字形	×	不完	黒褐色土、柱痕跡に褐色土、風化礫混合
3	36×30	18×18	30	〃	×	〃	〃　柱痕跡に暗褐色土、風化礫混合
4	68×48	37×44	30	〃	×	〃	暗褐色土、柱痕跡に褐色土と黒褐色土混合、補強と思われる礫埋没
5	62×68	47×43	27		○	不明	礎石と思われる礫あり
6	42×35	30×23	39		×	〃	補強と思われる礫埋没
7	52×52	36×40	42		×	〃	〃
8	38×44	30×26	60		×	〃	
9	27×26	16×20	43		×	〃	
10	40×41	36×34	50	皿状	×	〃	暗褐色土
11	55×50	45×32	55		×	〃	
12	40×47	28×28	27	U字形	×	〃	黒褐色土に褐色土わずかに混合
13	60×54	41×38	40	〃	×	〃	黒褐色土に風化礫混合
14	98×90	88×64	10	皿状	×	〃	柱穴底部は褐色土、上部は暗褐色土、風化礫混合
15	65×62	42×38	44	U字形	×	〃	黒褐色土をベースに柱穴下部は褐色土がブロック状で混合
16	20×29	14×20	6		×	〃	
17	40×46	24×32	15	皿状	×	〃	柱穴下部は2ヶ所に褐色土がブロック状に埋土、上部は暗褐色土に風化礫混合
18	32×55	14×12	20	U字形	×	〃	
19	32×36	17×24	13	皿状	×	〃	暗褐色土に風化礫含む
20	38×38	30×20	18	U字形	×	不完	黒褐色土、柱痕跡は褐色土に黒褐色土が混合
21	38×40	32×30	19	〃	×	不明	黒褐色土、風化礫混合、補強と思われる礫埋没
22	36×32	28×27	12	〃	×	〃	黒褐色土、補強と思われる礫埋没
23	28×26	16×18	10	〃	×	〃	黒褐色土、補強と思われる礫埋没
24	28×28	18×13	27		×	〃	
25	47×47	39×43	10	皿状	×	〃	柱穴底部に２ヶ所落ちくぼみあり、暗褐色土
26	46×34	29×22	20	〃	×	〃	
27	38×36	30×28	16	皿状	×	不明	暗褐色土
28	44×39	28×28	30	U字状	○	不完	礎石と思われる礫埋没暗褐色土、褐色土、風化礫が混合して柱痕跡を埋め、他は黒褐色土
29	28×28	20×20	13	皿状	×	不明	暗褐色土
30	38×40	25×30	47	U字状	×	〃	柱穴半分は黒褐色土、他褐色土と黒褐色土が混合、補強と思われる礫埋没
31	40×53	25×27	42	〃	×	〃	U字形が二重の形に埋土、外側黒褐色土、内側暗褐色土
32	24×23	11×13			×	〃	
33	50×49	41×37	16	皿状	×	〃	暗褐色土、底部の方ほどうすい
34	40×38	26×30	22	〃	×	〃	〃
35	56×46	33×34	30	〃	×	〃	暗褐色土
36							(焼土径25×34、厚さ２～３cm、楕円形)
37	32×38	22×22	15	U字状	×	〃	暗褐色土に褐色土がブロック状に混合、風化礫混合
38	64×68	52×47	20	皿状	×	〃	暗褐色土、風化礫混合
39	46×36	36×27	27	U字状	×	〃	柱穴の½は流れ込みの形で褐色土、他は黒褐色土と褐色土の混合
40	34×58	12×30	35		×	〃	
41	36×33	20×20	46		×	〃	
42	36×44	40×30	23	皿状	○	〃	暗褐色土、褐色土混合、礎石と思われる礫埋没、補強と思われる礫埋没
43	41×48	32×36	7		×	〃	
44	125×100	63×99	14	皿状	○	〃	暗褐色土、褐色土混合、礎石と思われる礫埋没、補強と思われる礫埋没
45	40×52	12×24	22		×	〃	
46	38×39	23×15	24	U字状	×	〃	暗褐色土、柱補強と思われる礫埋没
47	33×37	24×30	12	皿状	×	〃	暗褐色土に褐色土混合
48	70×56	60×44	18		×	〃	
49	42×31	36×18	8		×	〃	
50	50×56	48×40	5		×	〃	
51	53×44	36×37	17		×	〃	
52	31×40	11×24	11		×	〃	柱補強と思われる礫埋没

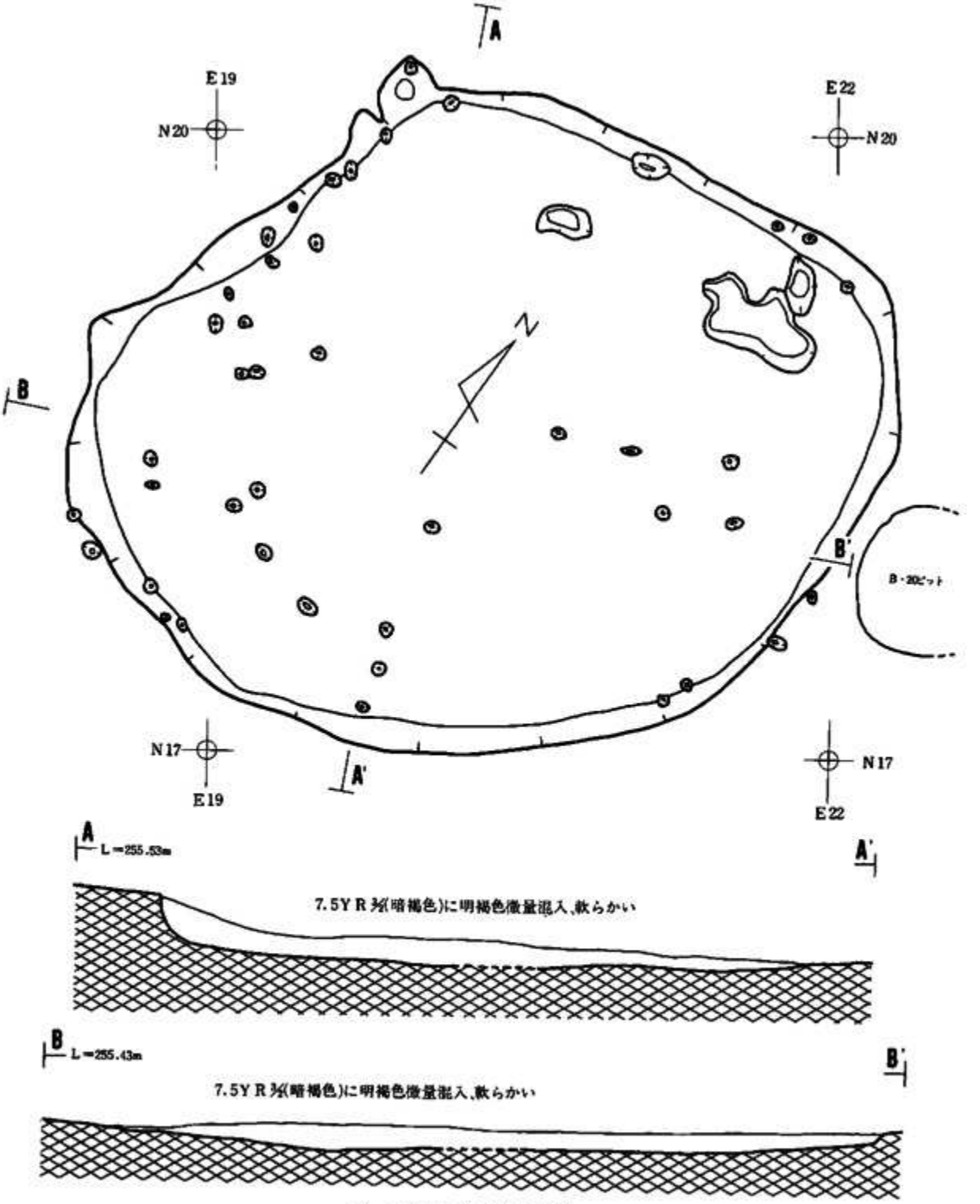
番号	開口部径	底部径	深さ	断面形	礫	柱あたり	埋土、その他
53	54×43	22×20	21		×	不　明	
54	46×36	29×22	41	U字形	×	〃	黒褐色土に褐色混合
55	42×36	25×27	55	〃	×	不　完	柱痕跡は暗褐色土、他は黒褐色土に褐色土がブロック状に混入
56	40×40	19×19	20		×	不　明	
57	56×52	29×28	44	U字形	×	不　完	柱痕跡は暗褐色土に褐色土混合、他は褐色土
58	36×42	24×20	18		×	不　明	暗褐色土に褐色土ブロック混合
59	52×42	28×35	80	U字形	×	不　完	柱痕は黒褐色土のみ、まわり褐色土
60	22×23	12×13	15		×	不　明	
61	35×35	23×24	29	U字形	×	不　完	柱痕黒褐色土　まわり黒褐色土に褐色土混合、補強と思われる礫埋没
62	50×46	46×24	20		○	不　明	礎石と思われる礫埋没、二重のU字形に埋土、外側黒褐色土に褐色土混合、内側黒褐色土
63	45×39	30×25	31	U字形	×	〃	黒褐色土に褐色土混合
64	57×49	40×27	16	皿　状	×	〃	〃
65	44×36	26×22	30		○	〃	礎石と思われる礫埋没
66	66×44	17×34	22		×	〃	
67	34×33	19×20	41		×	〃	
67′	34×30	28×24	36		×	〃	
68	30×32	20×19	27		×	〃	
68′	39×32	24×30	25		×	〃	
69	32×32	22×22	17	U字形	×	〃	暗褐色土に褐色土がブロック状に混合
70	32×32	16×14	37		×	〃	
71	40×39	28×26	55		×	〃	
72	55×48	45×21	22	U字形	×	〃	
73	44×34	24×25	43	〃	×	〃	暗褐色土、下の方は褐色土多く混合
74	97×42	25×22	34	〃	×	〃	黒褐色土に褐色土混合
75	41×42	18×25	17		×	〃	
76	56×50	28×26	37	U字形	×	〃	柱穴下部は暗褐色土に褐色土混合、上部暗褐色土
77	34×36	27×29	14	〃	×	〃	黒褐色土に褐色土粒混合
78	38×38	22×21	40	〃	×	〃	〃　　柱補強と思われる礫埋没
79	36×40	28×26	33	〃	×	〃	〃
80	32×30	18×20	59	皿　状	×	〃	黒褐色土
81	34×34	26×29	16	〃	×	〃	黒褐色土に褐色土混合
82	88×42	30×38	22		×	〃	
82	88×42	16×18	27		×	〃	
83	38×38	25×30	29	U字形	×	不　完	柱痕には黒褐色土、まわりに褐色土が混合、柱補強と思われる礫埋没
84	47×46	30×32	42	〃	×	不　明	柱穴の半分に黒褐色土、他は褐色土多し、柱補強と思われる礫埋没
85	29×26	16×26	49	〃	×	〃	黒褐色土に褐色土粒混合、柱補強のためと思われる礫埋没
86	36×34	26×20	39	〃	×	〃	暗褐色土に褐色土、風化礫混合
87	28×24	16×21	32	〃	×	〃	〃
88	60×40	42×12	55	〃	×	〃	〃
89	32×34	21×20	49	〃	×	〃	
90	80×26	63×20	50	〃	×	〃	柱補強と思われる礫埋没



図版3　寒風遺跡遺構配置図（1）



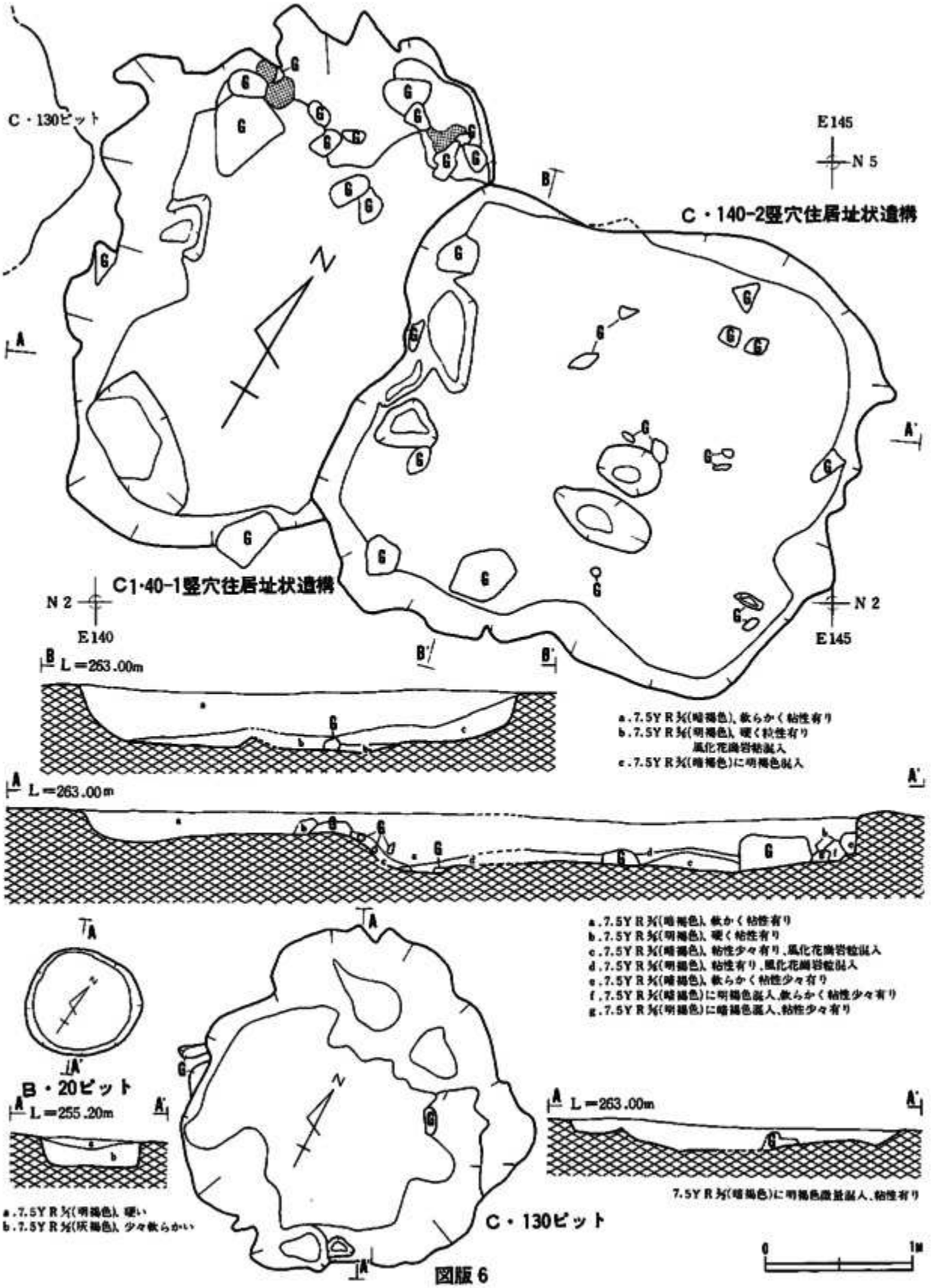
図版4　寒風遺跡遺構配置図(2)



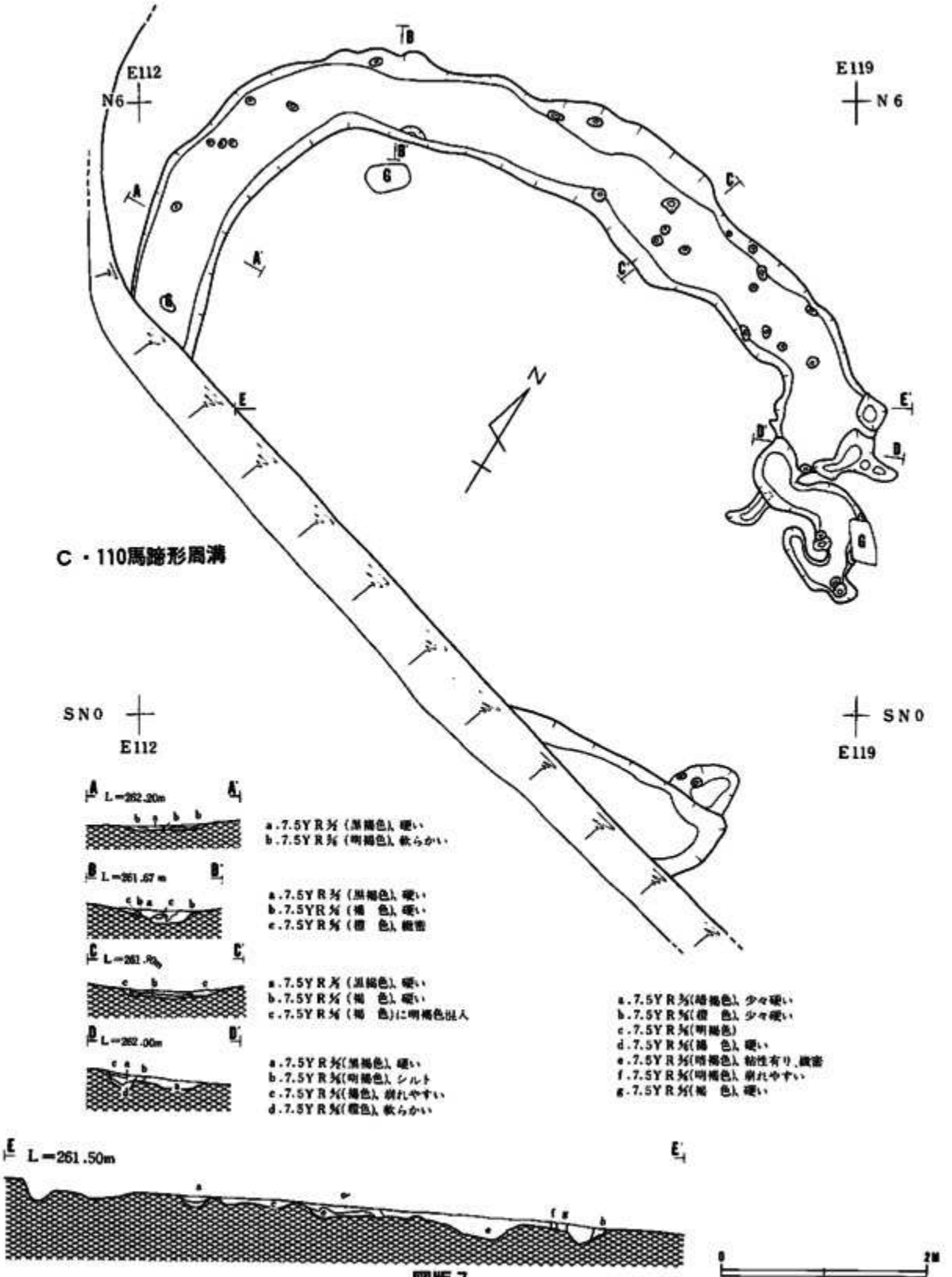
B・10竪穴住居址状遺構

0 1M

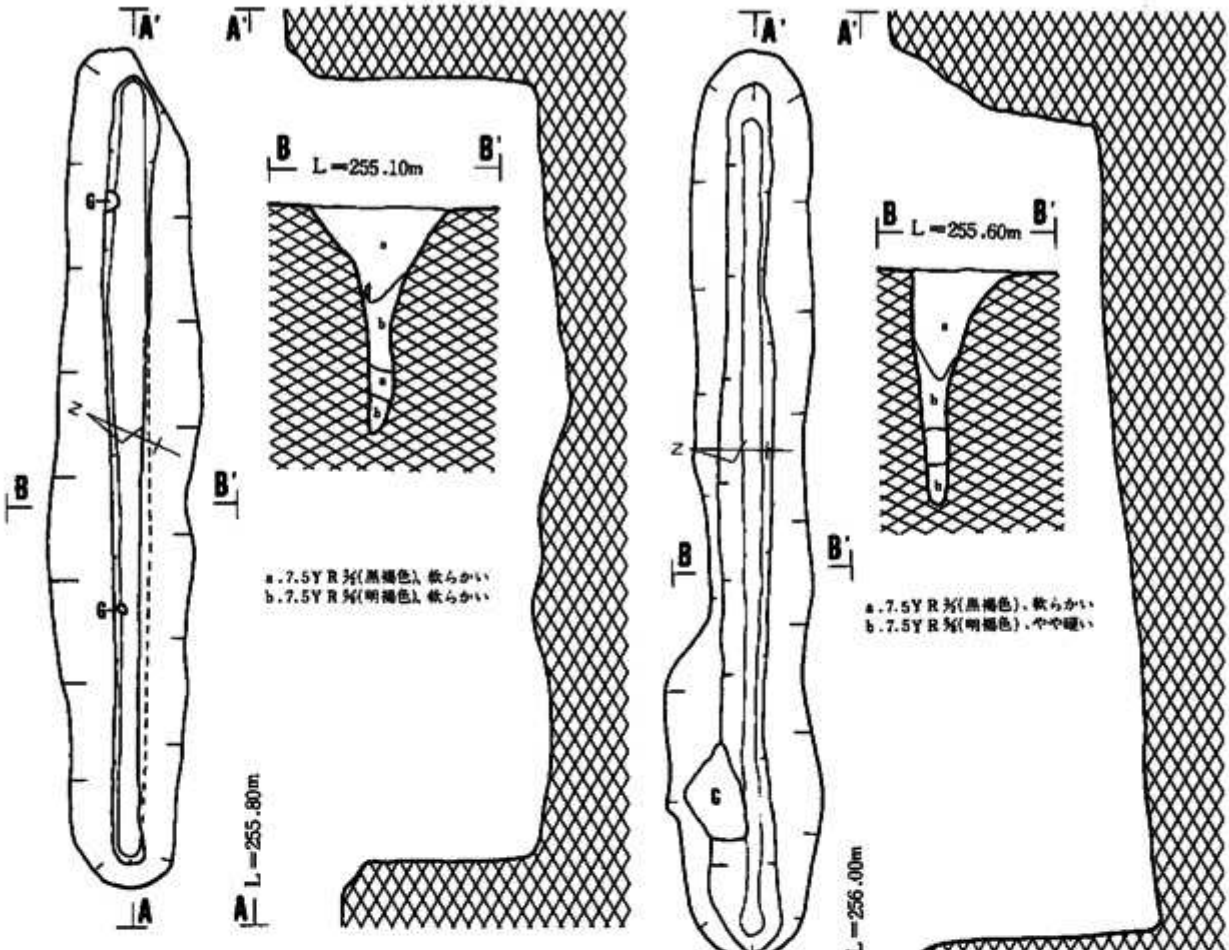
図版 5


C・130ピット
E145
N 5
C・140-2竪穴住居址状遺構
C1・40-1竪穴住居址状遺構
N 2
E140
N 2
E145
L＝263.00m
a.7.5Y R 3/1(暗褐色)、軟らかく粘性有り
b.7.5Y R 3/1(明褐色)、硬く粘性有り
風化花崗岩粒混入
c.7.5Y R 3/1(暗褐色)に明褐色混入
L＝263.00m
a.7.5Y R 3/1(暗褐色)、軟かく粘性有り
b.7.5Y R 3/1(明褐色)、硬く粘性有り
c.7.5Y R 3/1(暗褐色)、粘性少々有り、風化花崗岩粒混入
d.7.5Y R 3/1(明褐色)、粘性有り、風化花崗岩粒混入
e.7.5Y R 3/1(暗褐色)、軟らかく粘性少々有り
f.7.5Y R 3/1(暗褐色)に明褐色混入、軟らかく粘性少々有り
g.7.5Y R 3/1(明褐色)に暗褐色混入、粘性少々有り
B・20ピット
L＝255.20m
a.7.5Y R 3/1(明褐色)、硬い
b.7.5Y R 3/1(灰褐色)、少々軟らかい
L＝263.00m
7.5Y R 3/1(暗褐色)に明褐色微量混入、粘性有り
C・130ピット
0
1M

図版 6

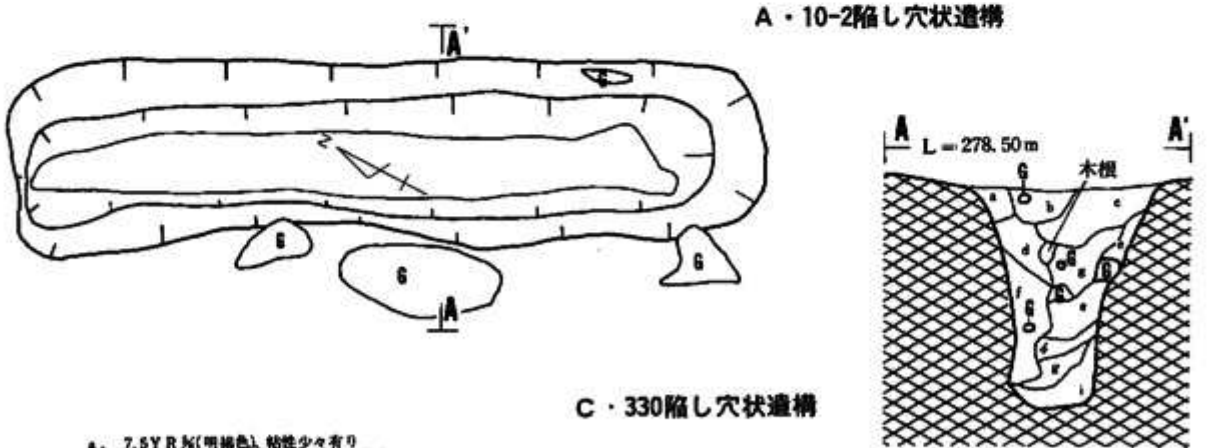

C・110馬蹄形周溝
E112
N6
E119
N6
SN0
E112
SN0
E119
N
A L=262.20m
a.7.5YR3/1(黒褐色)、硬い
b.7.5YR5/6(明褐色)、軟らかい
B L=261.67m
a.7.5YR3/1(黒褐色)、硬い
b.7.5YR5/6(橙　色)、硬い
c.7.5YR5/6(橙　色)、緻密
C L=261.80m
a.7.5YR3/1(黒褐色)、硬い
b.7.5YR5/6(橙　色)、硬い
c.7.5YR5/6(橙　色)に明褐色混入
D L=262.00m
a.7.5YR3/1(黒褐色)、硬い
b.7.5YR5/6(明褐色)、シルト
c.7.5YR5/6(褐色)、崩れやすい
d.7.5YR5/6(橙色)、軟らかい
a.7.5YR3/3(暗褐色)、少々硬い
b.7.5YR5/6(橙　色)、少々硬い
c.7.5YR5/6(明褐色)
d.7.5YR5/6(褐　色)、硬い
e.7.5YR5/6(明褐色)、粘性有り、緻密
f.7.5YR5/6(明褐色)、崩れやすい
g.7.5YR5/6(橙　色)、硬い
E L=261.50m
0
2M

図版7



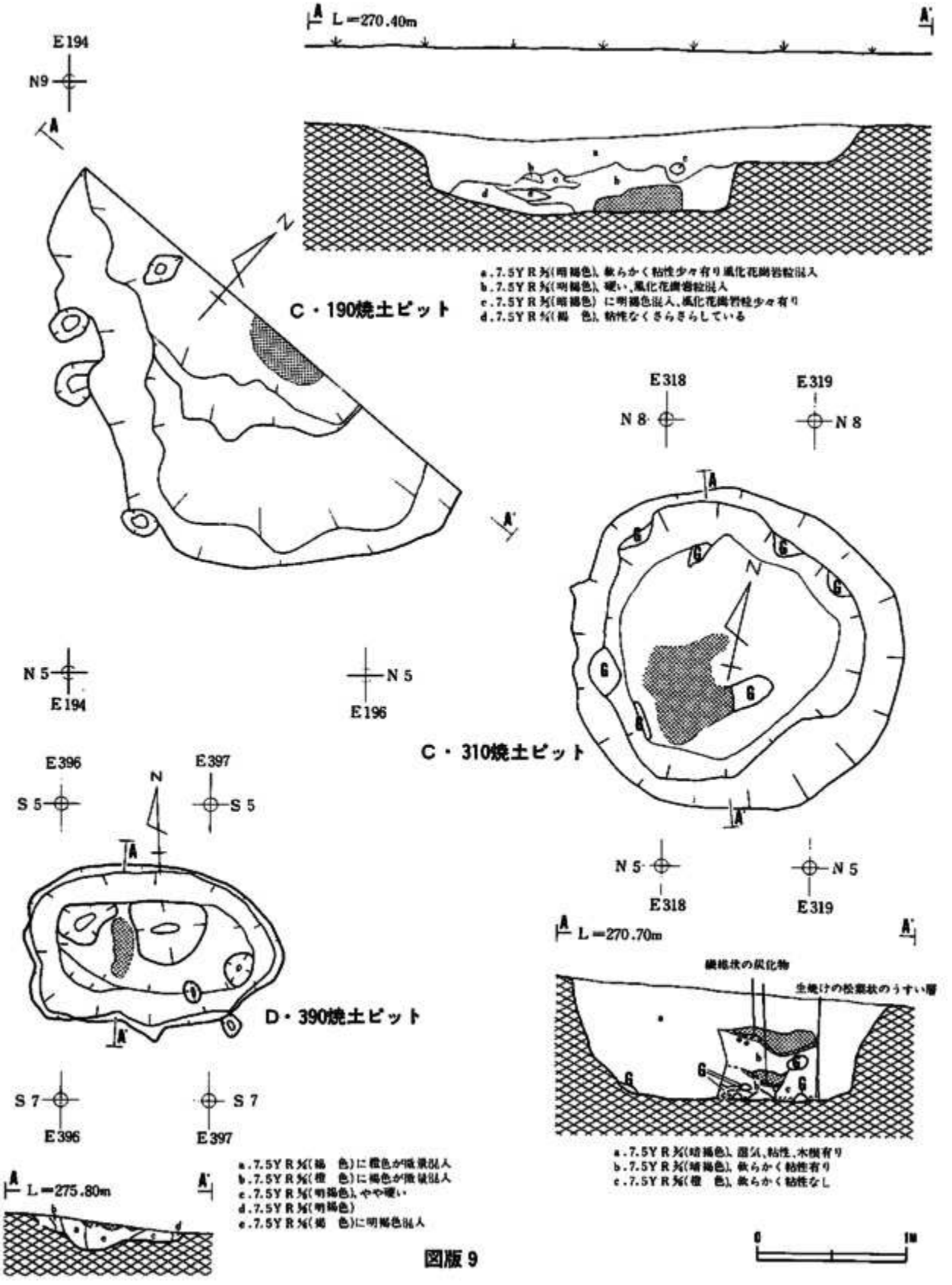
A・10-1陥し穴状遺構

A・10-2陥し穴状遺構

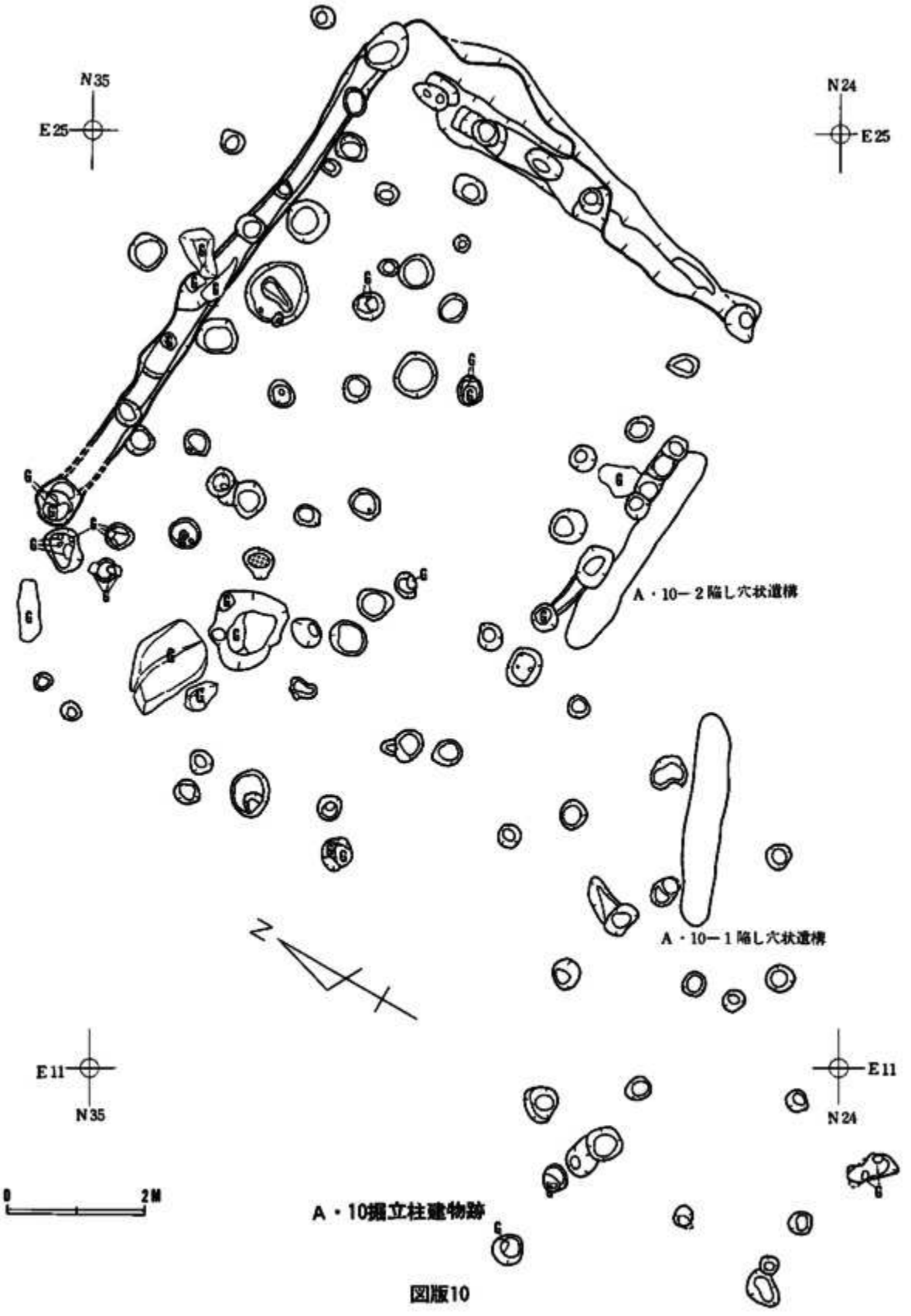


C・330陥し穴状遺構

図版 8


L=270.40m
E194
N9
C・190焼土ピット
a.7.5YR 3/1(明褐色)、軟らかく粘性少々有り風化花崗岩粒混入
b.7.5YR 3/1(明褐色)、硬い、風化花崗岩粒混入
c.7.5YR 3/1(暗褐色) に明褐色混入、風化花崗岩粒少々有り
d.7.5YR 3/1(褐　色)、粘性なくさらさらしている
E318
E319
N8
N8
N5
E194
N5
E196
C・310焼土ピット
N5
E318
N5
E319
E396
E397
S5
S5
D・390焼土ピット
S7
E396
S7
E397
L=275.80m
a.7.5YR 3/4(褐　色)に橙色が斑状混入
b.7.5YR 3/4(橙　色)に褐色が斑状混入
c.7.5YR 3/1(明褐色)、やや硬い
d.7.5YR 3/1(明褐色)
e.7.5YR 3/4(褐　色)に明褐色混入
L=270.70m
横棒状の炭化物
生焼けの松葉状のうすい層
a.7.5YR 3/1(暗褐色)、湿気、粘性、木根有り
b.7.5YR 3/1(暗褐色)、軟らかく粘性有り
c.7.5YR 3/4(橙　色)、軟らかく粘性なし
0
1M

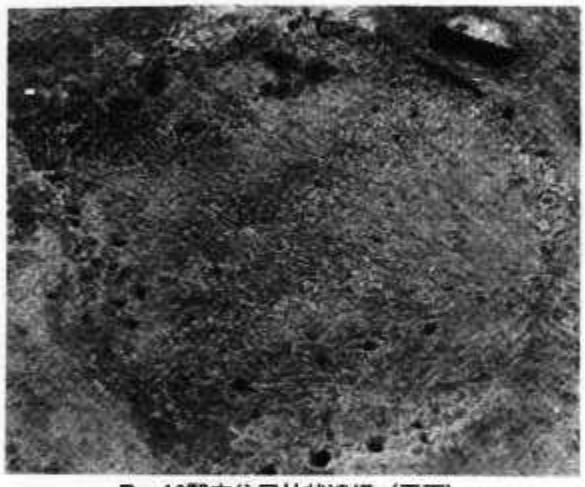
図版 9



A・10掘立柱建物跡

図版10

寒風遺跡全景



B・10竪穴住居址状遺構（平面）

B・10竪穴住居址状遺構（断面）

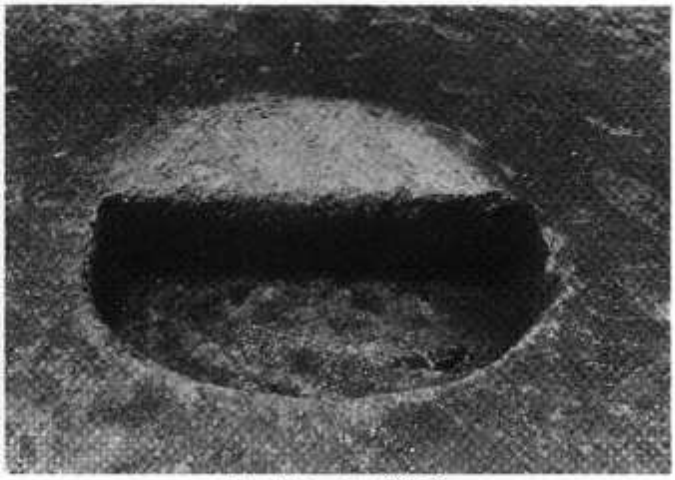
C・140—1，2竪穴住居址状遺構（平面）

C・140—1竪穴住居址状遺構（断面）

C・140—2竪穴住居址状遺構（断面）

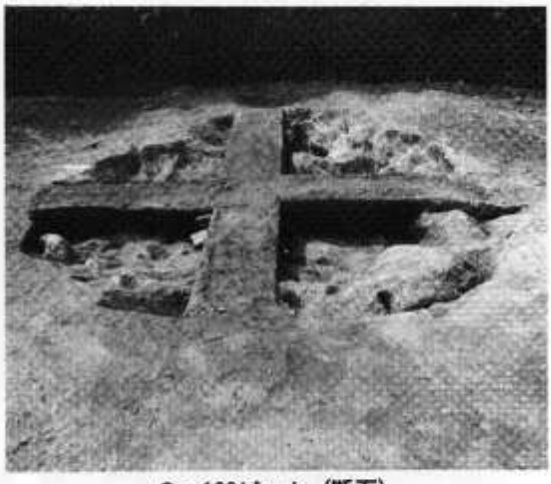
写真図版1

B・20ピット（平面）



B・20ピット（断面）

C・130ピット（平面）



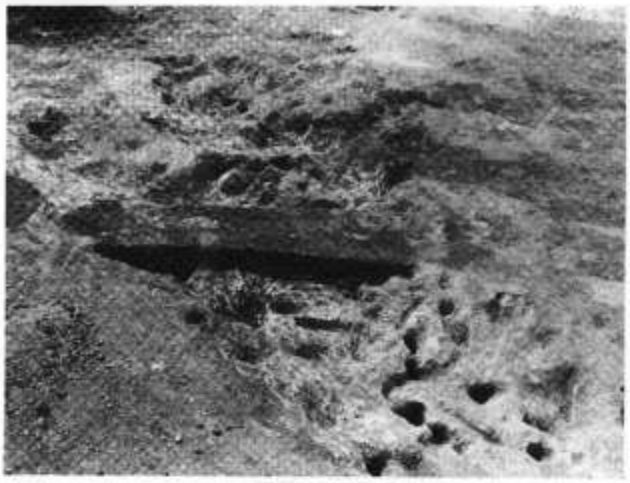
C・130ピット（断面）

C・110馬蹄形周溝（平面）

C・110馬蹄形周溝（断面）

写真図版 2

C・110馬蹄形周溝（断面）



C・110馬蹄形周溝（断面）

A・10―1陥し穴状遺構（平面）

A・10―1陥し穴状遺構（断面）

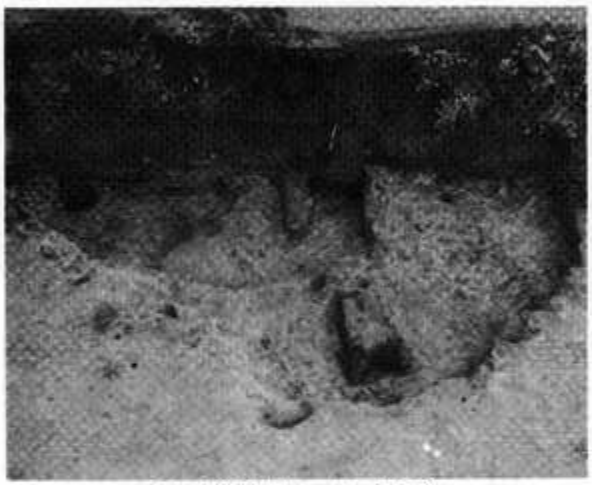
A・10―2陥し穴状遺構（平面）

A・10―2陥し穴状遺構（断面）

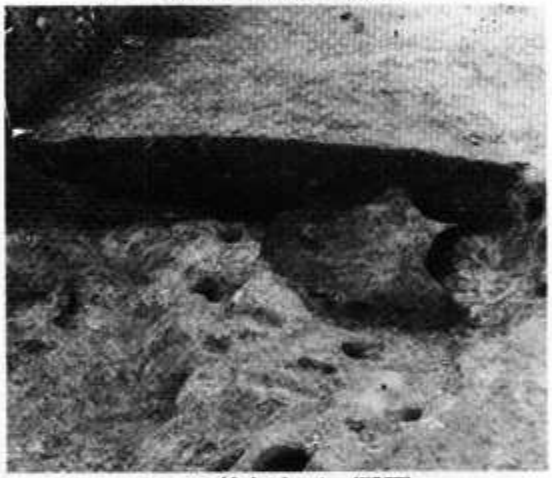
写真図版3

C・330陥し穴状遺構（平面）

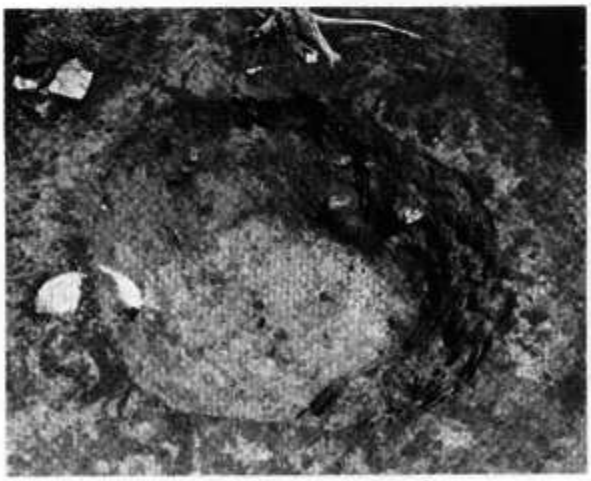
C・330陥し穴状遺構（断面）



C・190焼土ピット（平面）



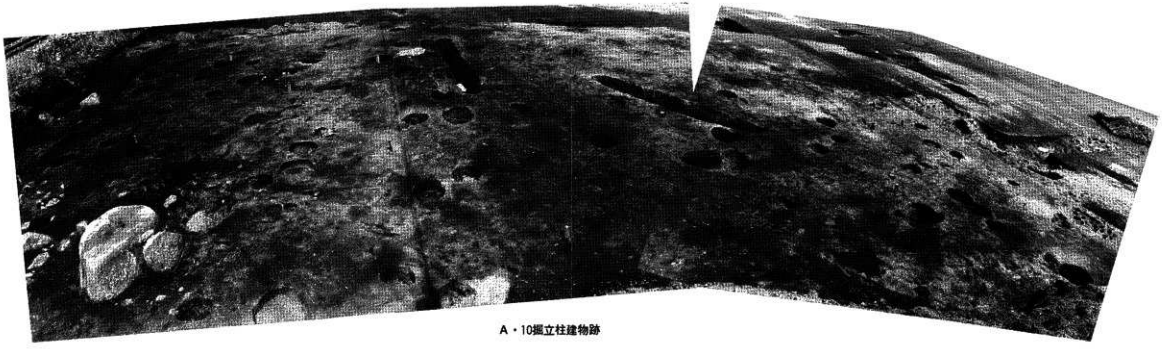
C・190焼土ピット（断面）



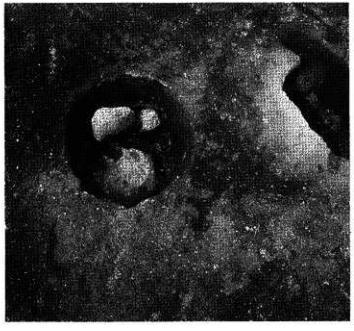
C・310焼土ピット（平面）

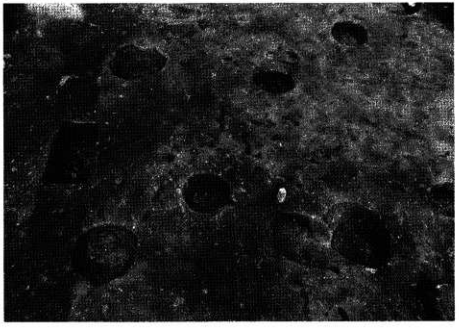
C・310焼土ピット（断面）

写真図版4



A・10掘立柱建物跡





A・10掘立柱建物跡（柱穴）

写真図版5

2．遺物

出土遺物は縄文式土器、土師器、石器、銭貨、鉄製品、鉄滓等である。特に土器、石器のほとんどはⅡ区C・140竪穴住居址状遺構近くの埋没谷埋土、Ⅲ区の凹地、Ⅳ区の埋没谷埋土からの出土である。

(1) 土器

縄文式土器、土師器、陶器に分けられ、いずれも破片のみである。その破片も口縁部、底部は少なく大部分は胴体部である。縄文式土器は胎土に植物質繊維を含んだものが最も多い。本遺跡出土の土器分類は繊維土器を中心に行なった。分類基準は以下のとおりである。

第1群　縄文式土器

a類　植物質繊維を含む押型文土器　　b類　植物質繊維を含む縄文土器

c類　植物質繊維を含まない縄文施文以外の土器

第2群　土師器

第3群　陶器

第1群　縄文式土器

a類（植物質繊維を含む押型文土器）

1．山形の文様を重ねた山形押型文、山形文の中に菱形を刻んだ押型文、山形の押型文などがあり、それぞれに回転の節目がみられる。胎土は硬くしまっており、砂粒、石英粒がみられ、植物質繊維の混入は少ない。内面調整は全般的にスベスベしているが、一部胎土によるものか、ザラザラしたものもある。①は煤状の炭化物が付着している。色調は茶褐色(①、②、⑦、⑨、⑩)と暗褐色(③、④、⑤、⑥、⑧)のものがある。(図版11の①～⑩・写真図版6の①～⑩)

2．山形の文様を重ねた山形押型文で、回転の節目の部分に2本の平行沈線と推測される施文がある。胎土は硬くしまっており、わずかながら砂粒、石英粒がみられる。植物質繊維の混入は少ない。内面調整はスベスベしている。色調は暗褐色である。(図版11の⑪・写真図版6の⑪)

3．菱形の文様が格子目状に施文された押型文で、回転の節目がみられる。胎土は硬く、砂粒、石英粒が多くみられ、植物質繊維の混入は少ない。内面調整は多少ザラザラしている。色調は暗褐色で、煤状の炭化物が付着している。(図版11の⑫・写真図版6の⑫)

b類（植物質繊維を含む縄文土器）

1　LRの単節斜行縄文である。胎土は植物質繊維の残存が顕著であり、糸状にその状態が

みられ、⑲は器の表面にも顕著である。あまり硬いとはいえない。胎土に砂粒がみられ、石英粒は⑬にみられるくらいである。内面調整は概してあらく、繊維質の炭化物が残存したためかなめらかではない。縄文原体は節によって大・中・小に分けられる。また施文がはっきりしたものとそうでないものがある。また㉑には内面に、㉓には外面に煤状の炭化物の付着がみられる。色調は明褐色(⑬～㉒、㉔)と褐色である。(図版11の⑬～㉔・写真図版６、７の⑬～㉔)

２．㉚はＲＬ、それ以外はＬＲの単節斜行縄文である。植物質繊維が糸状に残存しているものの、⑬～㉔のグループほどではない。胎土に砂粒がみられるが、石英粒はわずかである。焼成は硬くなく、内面調整が概してあらく、㉚、㉛はそれが顕著である。煤状の炭化物が内面に付着しているもの（㉙）と外面に付着しているもの（㉛）がある。色調は明褐色（㉕、㉗～㉚）と褐色（㉖、㉛）である。（図版11の㉕～㉛・写真図版７の㉕～㉛）

３．ＬＲの単節斜行縄文である。植物質繊維の残存が少ない。胎土に砂粒、石英粒がみられ、㉞、㊱には粒の大きな石英粒がみられる。内面調整は㉜をのぞいて粗い。焼成は硬くない。色調は茶褐色(㉜、㉟)と褐色(㉝、㉞、㊱)である。(図版12の㉜～㊱・写真図版７の㉜～㊱)

４．ＬＲＬの複節斜行縄文で、植物質繊維の残存が顕著である。砂粒がみられないもの(㊲)と砂粒、石英粒ともにみられるもの(㊳)があり、焼成は硬くない。㊳の表面には僅かに条痕がみられる。色調は褐色(㊲)と明褐色(㊳)である。（図版12の㊲、㊳・写真図版７の㊲、㊳）

５．０段多条の多子撚糸文で、植物質繊維が外面、内面ともに残存している。砂粒は僅かだが、石英粒は比較的多くみられる。内面調整はザラザラしており焼成は硬くない。色調はにぶい褐色である。（図版12の㊴・写真図版７の㊴）

６．原体の異なる縄文を回転させた無結束の羽状縄文である。植物質繊維の残存が顕著である(㊵、㊷)、㊷は比較的少ない。㊶、㊷には砂粒、石英粒がみられるが、他のものにはみられない。内面調整は入念であり、いずれも煤状の炭化物がわずかに付着している。㊶の土器には孔がみられる。色調は褐色(㊶)と暗褐色(㊵、㊷）である。(図版12の㊵～㊷・写真図版７の㊵～㊷)

７．ＬＲの単節斜行縄文で、その文様が口唇部まで連続し、口縁部が外反しているもの(㊸、㊹、㊺、㊼)としていないものがある。㊼には口唇部に規則的な間隔で押圧文が施文されている。植物質繊維が内面に多く残り、その痕跡が微細な溝状となってみられる。緻密ではあるが繊維の残存で滑らかではない。色調は明褐色(㊸～㊺)と褐色である。(図版12の㊸～㊼・写真図版８の㊸～㊼)

８．ＲＬの単節斜行縄文で、その文様が口唇部まで連続し、口縁部はやや外反しているもの(㊽、㊾)としていないものがある。㊿は外反していず押圧文が縄文をはさんで平行して施文してある。いずれも植物質繊維の残存は少ない。㊿は砂粒がみられ緻密ではない。色調は灰褐色（㊽）と明褐色である。（図版12の㊽～㊿・写真図版８の㊽～㊿）

9．ＬＲの単節斜行縄文で、尖底深鉢土器の尖底部、体部と推測されるものである。植物質繊維の残存が顕著で濃密である。砂粒、石英粒がみられ、内面調整はあらく、尖底部が多少擦り減っている。焼成は硬くない。色調は明褐色（51）と褐色である。（図版12の51、52・写真図版８の51、52）

10．口唇部に横位撚糸圧痕文が施文されているもの（53）と口唇部に間隔をおいて圧痕文があるもの（54）で、いずれもやや外反している。植物質繊維は少ない。54以外は胎土が緻密である。色調は明褐色である。（図版12の53、54・写真図版８の53、54）

Ｃ類（植物質繊維を含まない縄文施文以外の土器）

1．口唇部の下に半截竹管の刺突圧痕文が等間隔にならんでいる。口唇部は無文で口縁部は直立する。焼成は硬く、砂粒、石英粒ともみられず、内面調整は入念でスベスベしている。色調はにぶい褐色をしている。（図版12の55・写真図版８の55）

2．同一の工具による刺突圧痕と沈線によって文様を構成しているものである。沈線にはさまれて小さな刺突圧痕が近接して等間隔に並列するものと、比較的大きな圧痕が、前者より間隔をおいて並列するものである。植物質繊維、砂粒はみられず、焼成は硬くない。内面調整は比較的スベスベしている。褐色である。（図版12の56・写真図版８の56）

3．頸部とおもわれ、片部に近いところに小さな孔が等間隔に並列しており、ナデの痕跡がわずかにみられる。石英粒がみられ、ザラザラしている。焼成は硬く、茶褐色である。（図版12の57・写真図版８の57）

4．表裏に条痕文がみられる。頸部がわずかに残ったものと思われる。外面には細い条痕が斜位にみられ、内面はやや太い条痕が平行にはしっている。石英粒が微量にみられ、緻密ではなく、少しザラザラしている。外面には煤状の炭化物が付着し、にぶい褐色をしている。あまり硬くない。（図版12の58・写真図版８の58）

5．半截竹管による沈線が2本並列し、その上部に縄目の押圧文を等間隔に傾斜させて施文し、その下部には山形状の緩い沈線が施こされている。内面には放射状の痕跡があるが、作為的なものかどうかは不明である。内面調整はスベスベしていて硬い。明褐色である。（図版12の59・写真図版８の59）

6．無文の底部である。内面はナデが明瞭に残っている。明褐色で硬くない。（図版13の60・写真図版８の60）

第２群　土師器

すべて糸切りの底部であり、内黒処理されたもの（61、63）とナデ調整だけのものである。（図版13の61～63・写真図版８の61～63）

第3群　陶器

硬質の火消し壺ようのもの(㊹、㊺)で山形の文様が施文され、㊹には花弁様の文様が施文されている。また擂り鉢の口縁部や体部である。いずれも近世以後のものであろう。(図版13の㊹～㊿・写真図版9の㊹～㊿)

(2)　石器（参照：石質鑑定表）

a．石鏃（図版14の71～77・写真図版9の71～77）

71：基部がややくぼんでいる。周辺部加工は雑に行われ、先端部は摩滅している部分がある。裏面には左方向に巾広な主要剥離面がみられる。72：基部がくぼんでおり、両面ともY字状に稜線がはしっている。刃部は微細に加工されているが尖端が欠損し、その周辺に刃コボレがみられる。73：石槍様のもので、刃部は微細に加工されているが尖端が欠損している。

74：茎部が½を占め、茎部の稜線はその頂部から連続し、うすくなる。尖端がやや摩滅しているが、両面に調整加工が行われ、特に茎部は顕著である。75：基部がくぼんで、両面が鋭利に調整され、欠損しているが稜線はY字状と推測され、主要剥離面に光沢がみられる。76：茎部が½を占め、稜線は縁部にそってやや楕円形に形成され、先端は鋭利で入念に調整されている。裏面は第一次剥離面がやや平らである。光沢がある。

77：薄く基部がくぼんでいる。微細に剥離調整が行われている。刃部は薄く鋭利であるが、先端部は摩滅している。

b．石匙（図版14の78～84・写真図版9の78～84）

78：片面のみ刃部剥離調整がみられ、裏面は第一次剥離面が大半を占めている。刃部は鋭利であるが左下側端の加工調整はわずかにあらく、一部摩滅もみられる。79：表面の長軸右側に刃部剥離調整がみられ、その左側は原面で加工痕はわずかである。稜線はつまみ部から先端にやや直線にはしる。裏面はつまみ部と先端部に加工痕がみられるだけで、平らな第一次剥離面だけが残る。80：第一次剥離面が稜線を形成し、下端にかなり摩滅した刃部がみられる。裏面はつまみ部と下端にわずかに加工痕がみられるだけである。

81：両面に剥離調整が行われているが、表面の刃部およびつまみ部には顕著に表われている。右側縁は剥離面だけ残り稜線を形成している。裏面はつまみ部および側縁に調整が行われている。刃部はやや鋭利である。82：両面に入念な剥離調整が行われている。顕著なリングがみられ裏面の右側下には打ち痛裂痕がみられる。83：両面に剥離調整が行われ、つまみ部と左側縁の調整は微細に行われているが、刃部の調整はあらく、摩滅している部分もみられ鋭利ではない。裏面はつまみ部、左側縁に調整がみられるがあらい。

㉞：剥離調整が両面にわたり、表面は顕著で縁部周辺は入念に行われている。裏面はつまみ部に調整が行われており、第一次剥離面が広く半円状に残されている。刃部は鋭利である。

c．**石槍**（図版15の㉟・写真図版10の㉟）

㉟：やや中央に第一次剥離面が残り、入念に剥離調整が行われている。先端はやや摩滅している。光沢がある。

d．**不定形石器**（図版15の㊱～㊵・写真図版10の㊱～㊵）

㊱：尖端部両側面に片刃がみられ、リングが顕著にあらわれている。刃部は鋭利ではない。㊲：稜線の上部左側に打面が残るが調整されていない。右側面縁部はわずかに調整されている。刃部は鋭利である。㊳：わずかに、あらい刃部の両面加工が縁部にみられる。調整痕はわずかにみられるだけである。第一次剥離面が広く残され、その片側は欠損している。

㊴：第一次剥離面の側縁に自然面が多く残り、調整痕は尖端部にわずかに認められるだけである。裏面は先端部をのぞき、第一次剥離面だけである。㊵：尖端刃部とその両側縁に剥離調整がみられ、上部両側端は欠損している。稜線の左右には顕著にリングがみられ、裏面はわずかに調整痕がみられ、第一次剥離面が広がっている。光沢がある。

e．**削器**（図版15の㊶～㊻・写真図版10の㊶～㊻）

㊶：第一次剥離による縁部を利用して刃部を形成し、その縁は入念に調整がなされている。裏面は第一次剥離面に打ち瘤裂痕がみられる。光沢がある。㊷：剥片縁部を刃部に利用し、加工調整はみられないが鋭利である。多少摩滅している。裏面は第一次剥離面が広がっている。㊸：第一次剥離面を刃部にし、その縁部には剥離調整が片面におこなわれ、摩滅が認められる。

㊹：上端は欠損し、縁部の剥離調整は両面とも入念になされている。尖端部はわずかに調整がみられ、刃こぼれが生じている。裏面は左側縁部に調整痕がみられる。㊺：薄い剥片の側縁部を刃部に利用し、尖端と側面縁部に調整が行われ、刃部の調整は入念に行われている。側面刃部は鋭利で、尖端部は摩滅している。㊻：欠損した部分を除き、刃部の剥離調整部分は鋭利であり、微細に調整されているが、尖端部はあらく、摩滅がみられる。裏面は第一次剥離面だけである。

石質鑑定表

No 図版 写真	器種	石質（産地）
14/9の㉑	石鏃	珪質凝灰質粘板岩（北上山地、古生界）
〃 ㉒	〃	石質細粒凝灰岩
〃 ㉓	〃	玻璃質流紋岩
〃 ㉔	〃	〃
〃 ㉕	〃	〃
〃 ㉖	〃	石質細粒凝灰岩
〃 ㉗	〃	珪質凝灰質粘板岩（北上山地、古生界）
〃 ㉘	縦形石匙	石質細粒凝灰岩
〃 ㉙	〃	珪質凝灰質粘板岩（北上山地、古生界）
〃 ㉚	〃	石質細粒凝灰岩
〃 ㉛	横形石匙	珪質粘板岩（北上山地、古生界）
〃 ㉜	〃	〃 〃
〃 ㉝	〃	〃 〃
〃 ㉞	〃	珪質凝灰質粘板岩（北上山地、古生界）
15/10の㉟	石槍	石質細粒凝灰岩
〃 ㊱	不定形石器	鉄石英（北上山地、 ？ ）
〃 ㊲	〃	珪質凝灰質粘板岩（北上山地、古生界）
〃 ㊳	〃	流紋岩質細粒凝灰岩
〃 ㊴	〃	珪質凝灰質粘板岩（北上山地、古生界）
〃 ㊵	〃	〃 〃
〃 ㊶	削器	〃 〃
〃 ㊷	〃	玉髄（北上山地、中生界？）
〃 ㊸	〃	石質細粒凝灰岩
〃 ㊹	〃	珪質粘板岩（北上山地、古生界）
〃 ㊺	〃	玻璃質流紋岩（北上山地、中生界？）
〃 ㊻	〃	玻璃質流紋岩

(3) 銭貨（図版16の㊼～㊾・写真図版10の㊼～㊾）

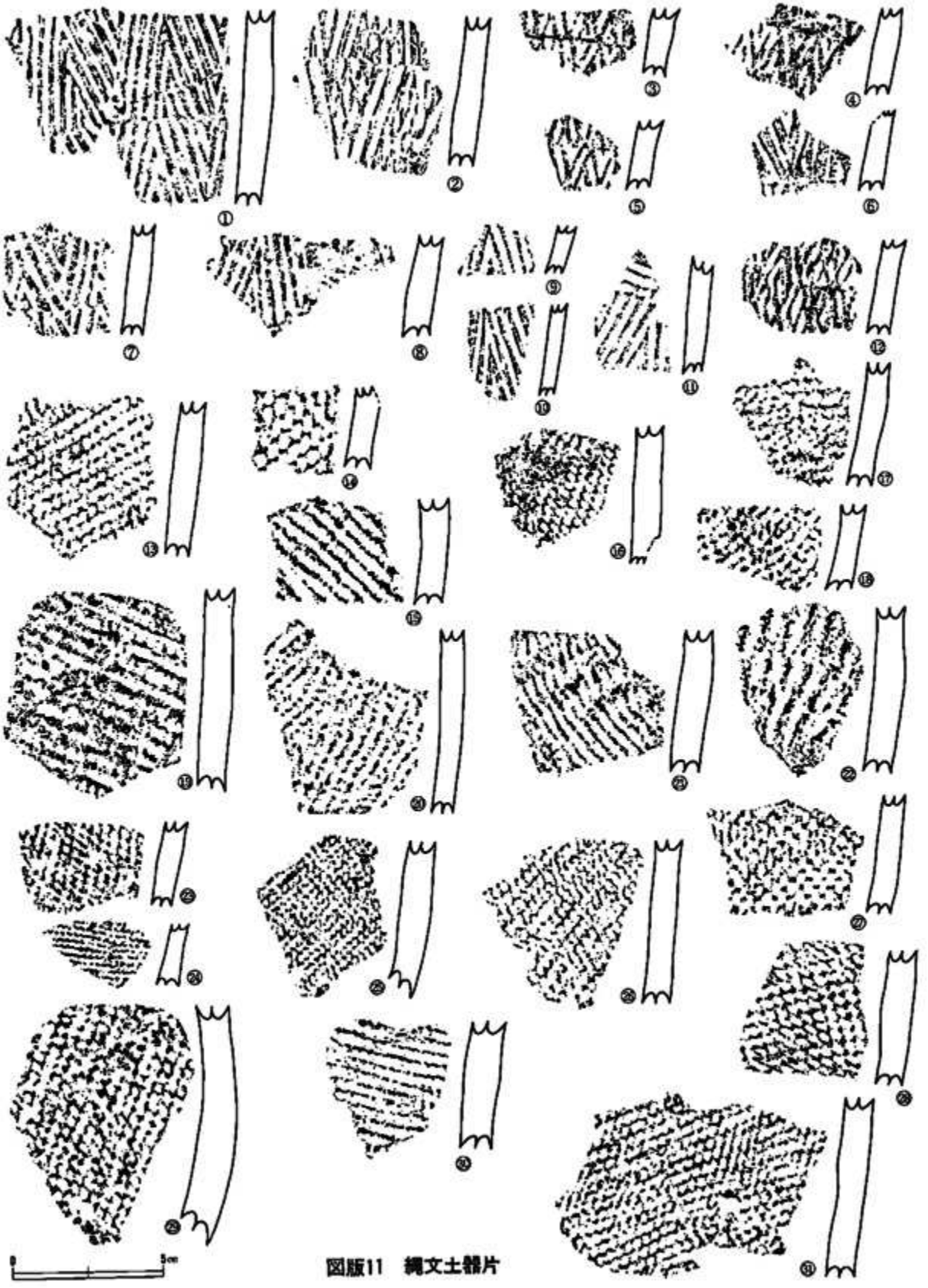
永楽通宝(㊼)と寛永通宝(㊽、㊾)が出土している。前者は明で鋳造された精銭と思われ、室町時代から江戸時代初期まで流通していたと言われる。後者の(㊽)は寛永13年頃（1636年）から寛文８年頃（1667年）まで流通し古寛永と呼ばれている。㊾は江戸時代中期頃まで流通していたといわれる。㊽、㊾は摩滅している。これらの銭貨は掘立柱建物跡付近から出土している。

(4) 鉄製品（図版16の㊿～⑭・写真図版11の㊿～⑭）

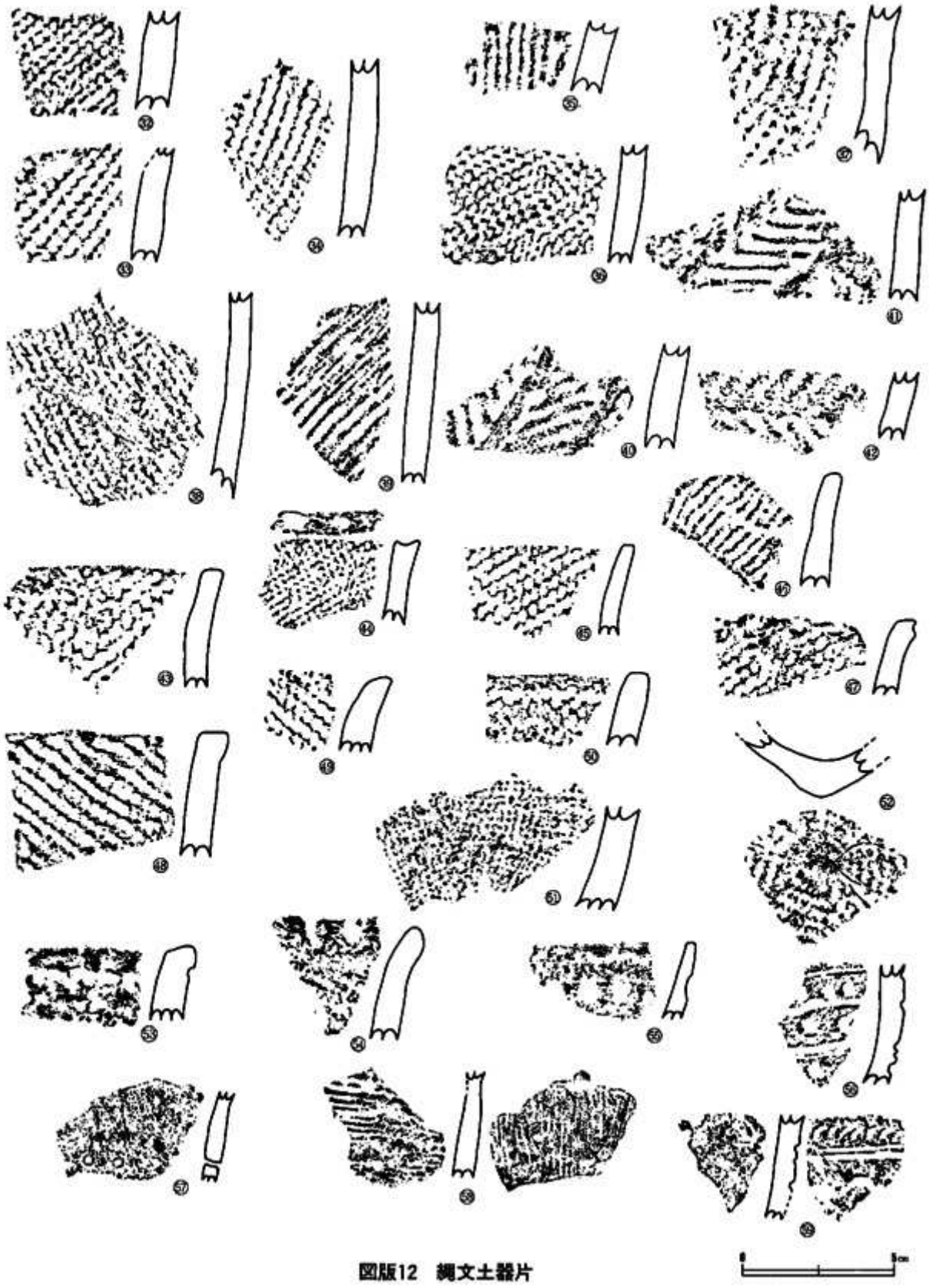
角釘と思われるもの(㊿～⑬)、両側端に孔があったと思われる鉄板(⑭)である。そのうち⑭は掘立柱建物跡付近から粗掘中に出土したものである。

(5) 鉄滓（写真図版11の⑮～⑳）

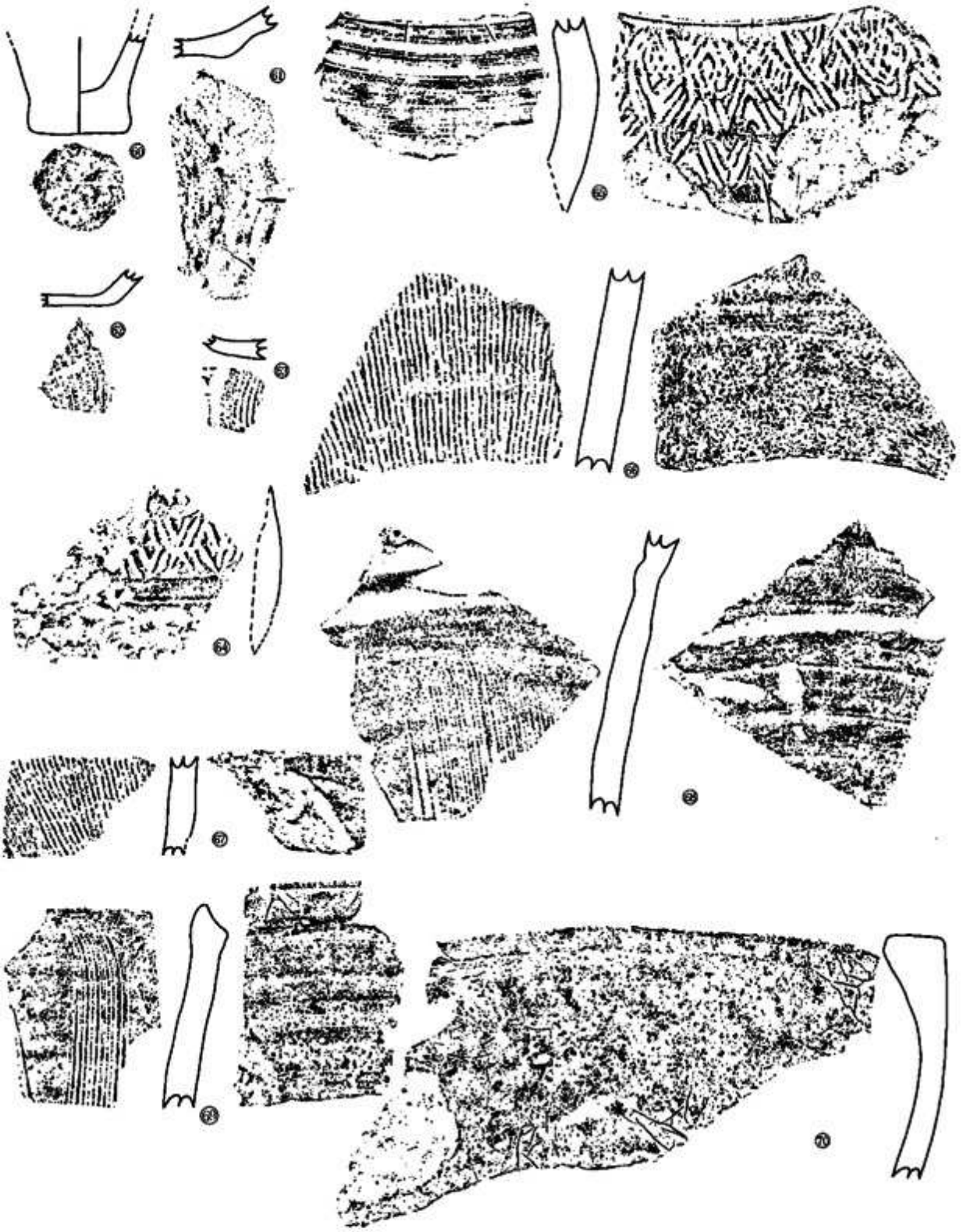
粗掘中に出土したもので、⑮は280g、⑯は140g、⑰は50g、⑱は40g、⑲は30g、⑳は20gの重量がある。⑯～⑳をのぞいてⅡ区から出土したものである。



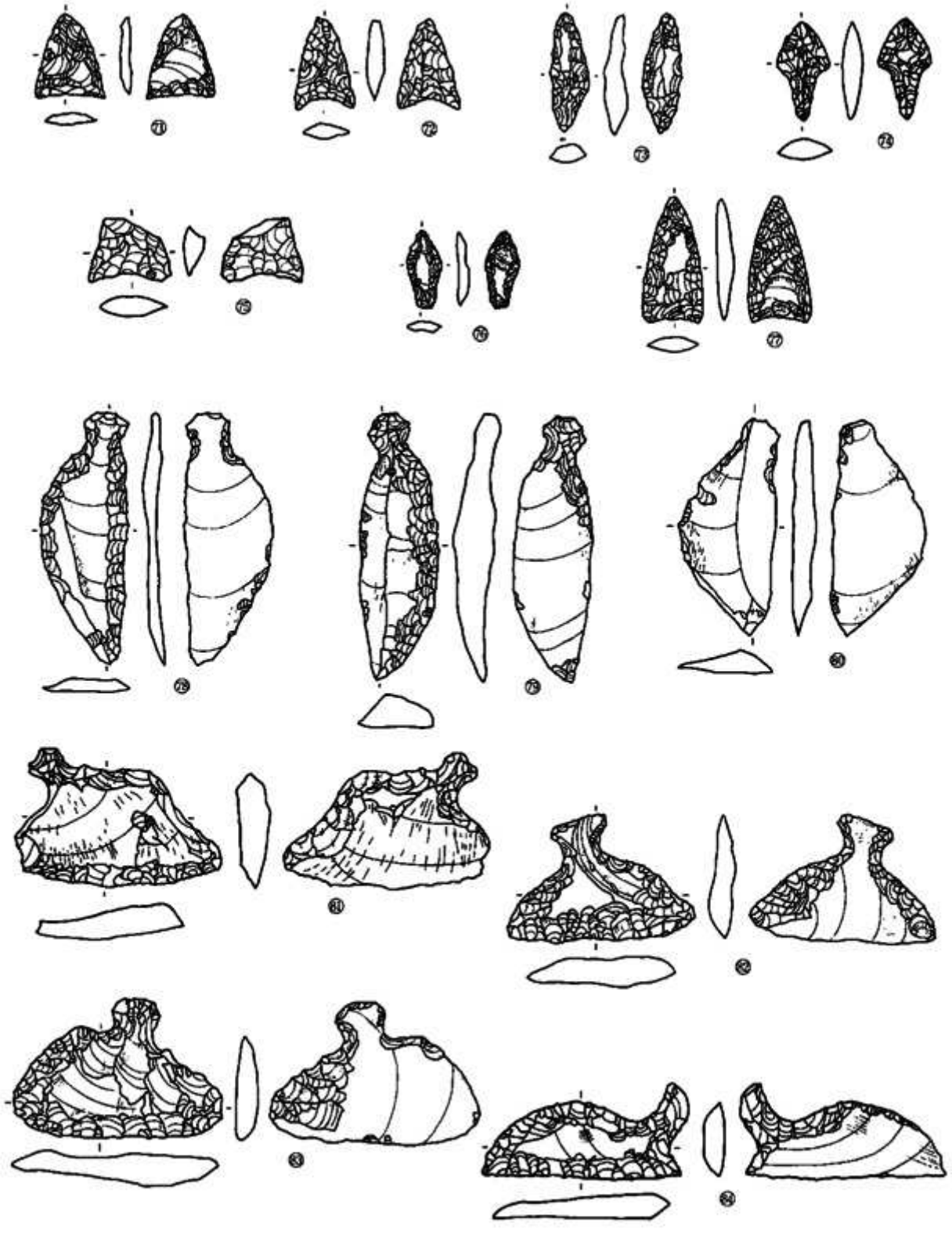
図版11　縄文土器片



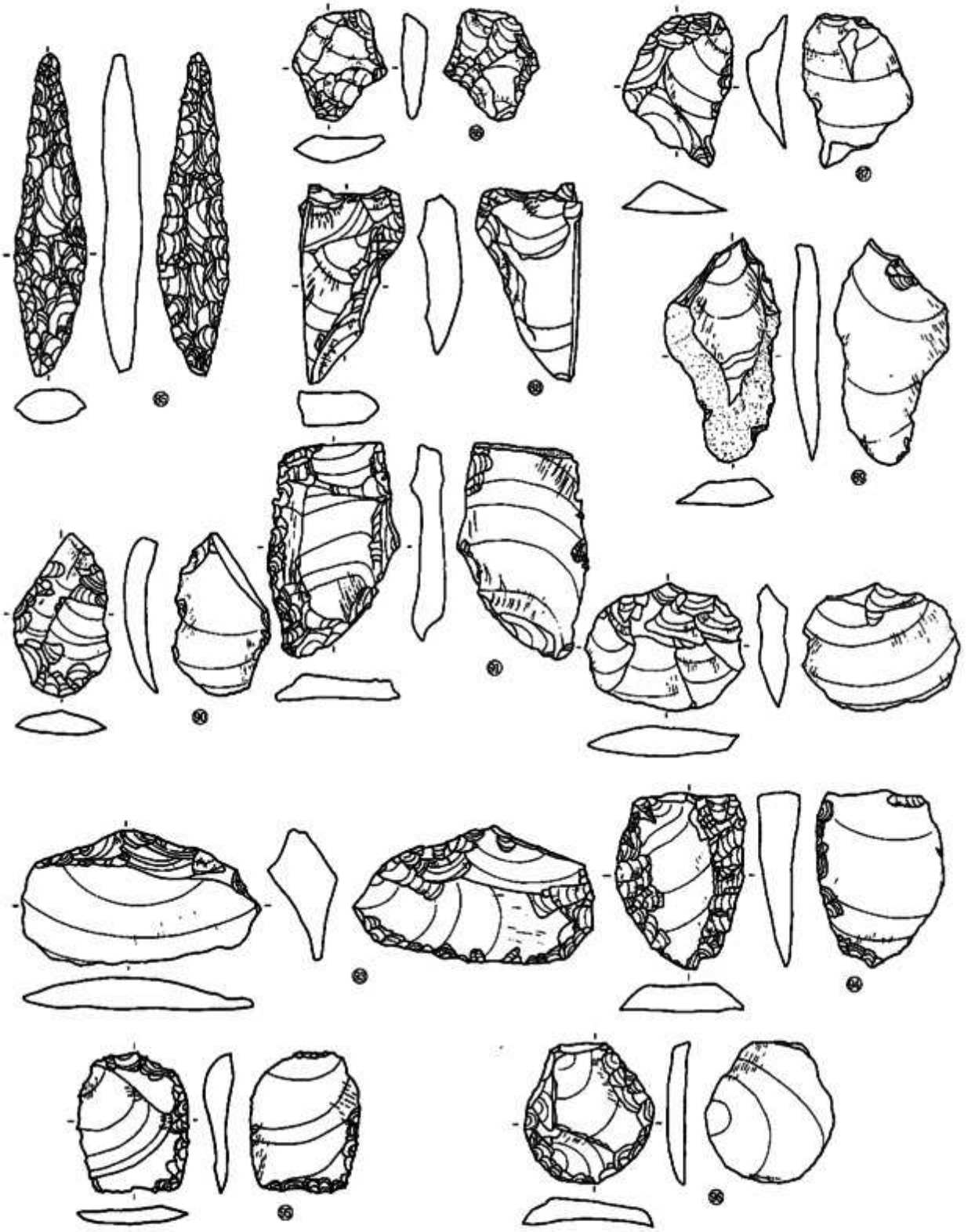
図版12　縄文土器片



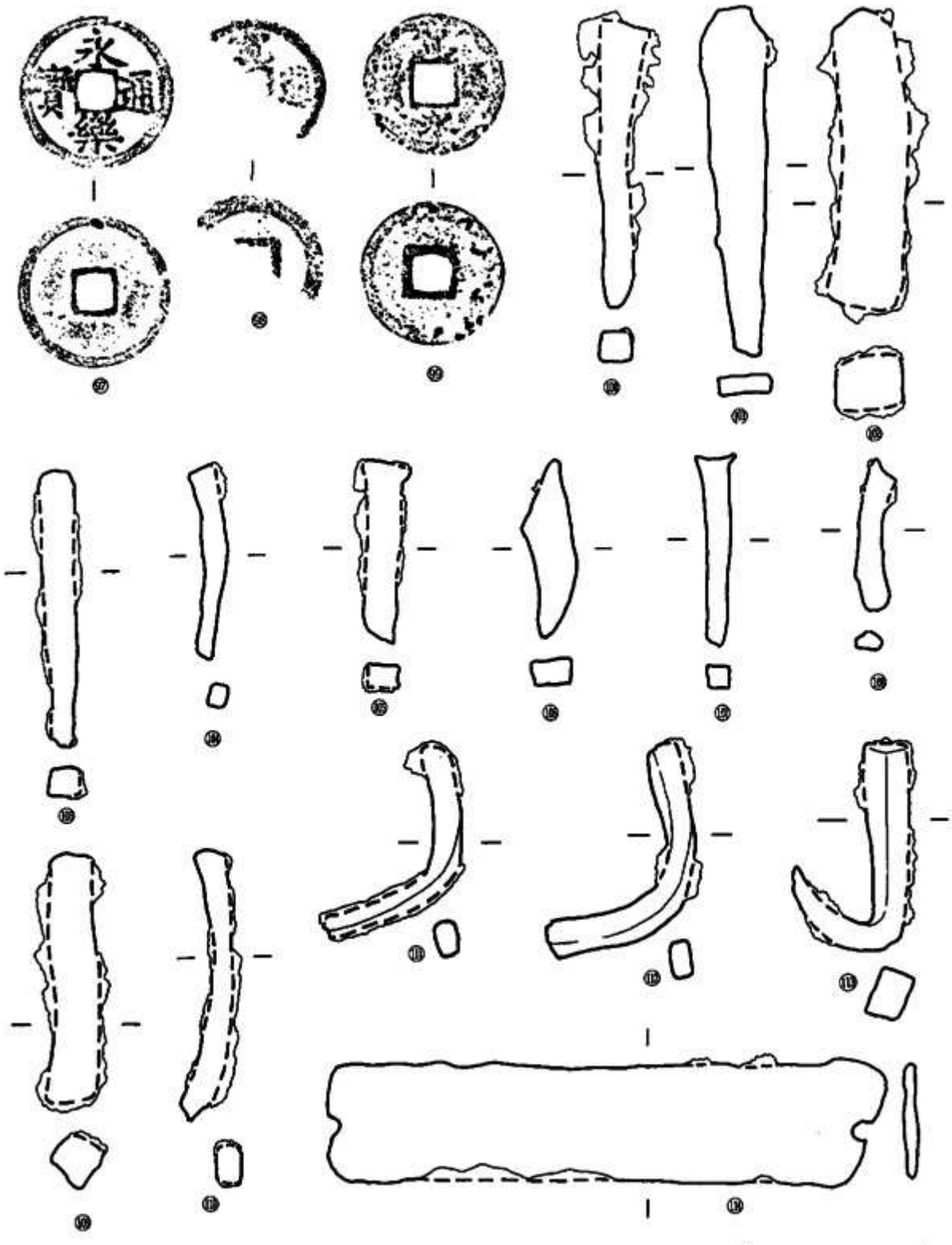
図版13　土師器片・陶器片



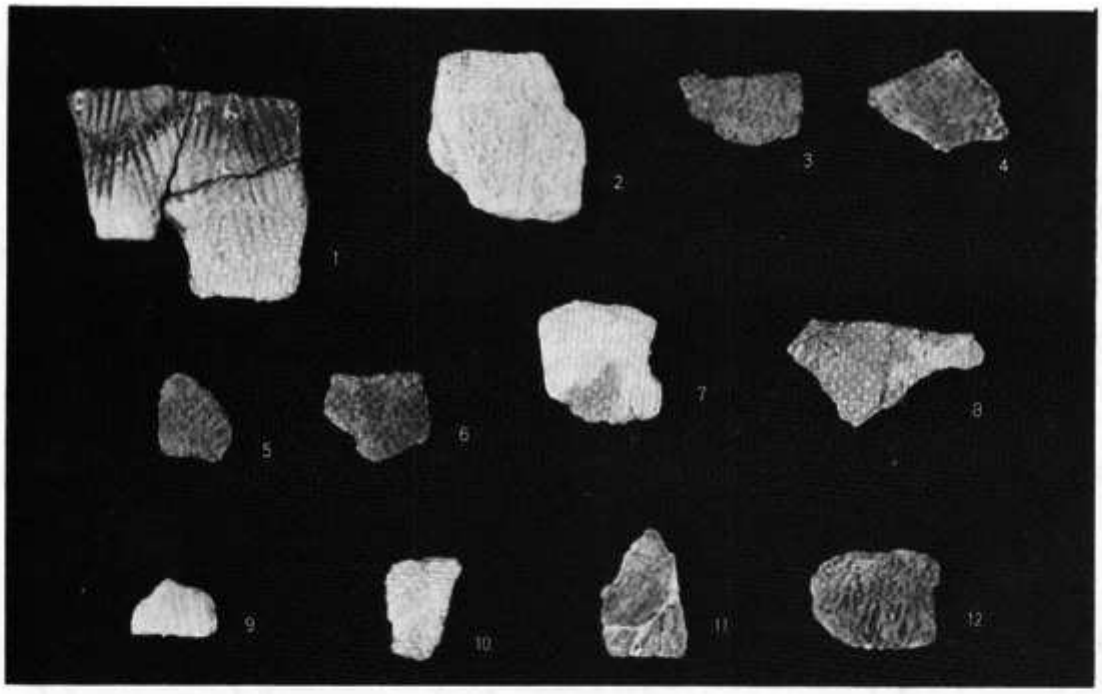
図版14 石 器

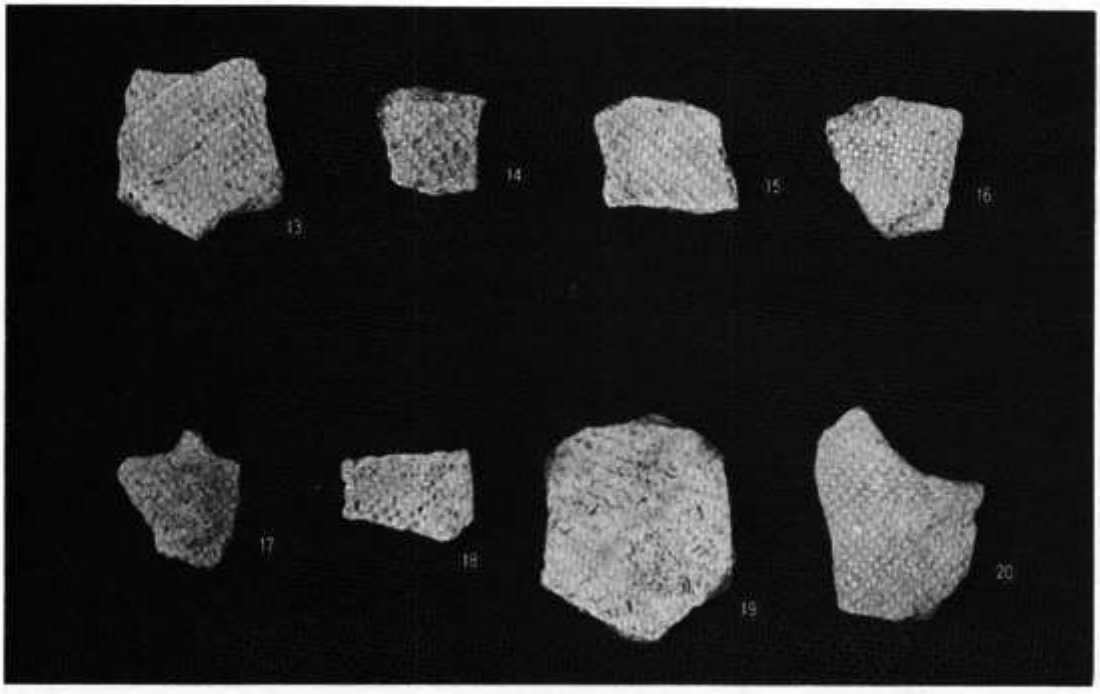


図版15 石 器

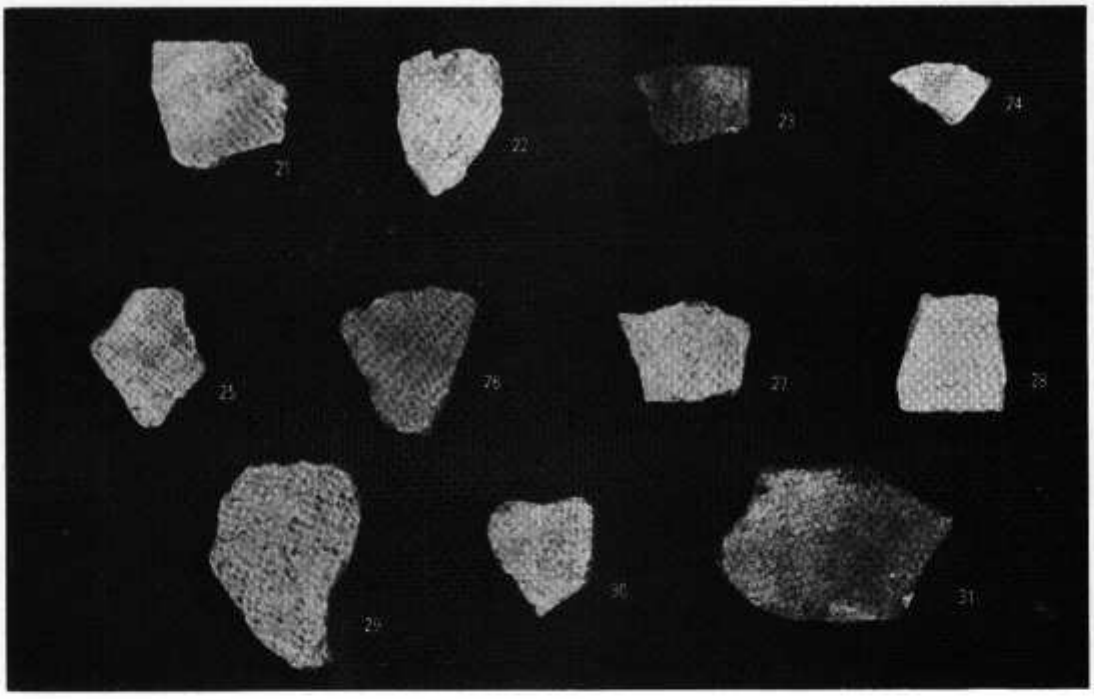


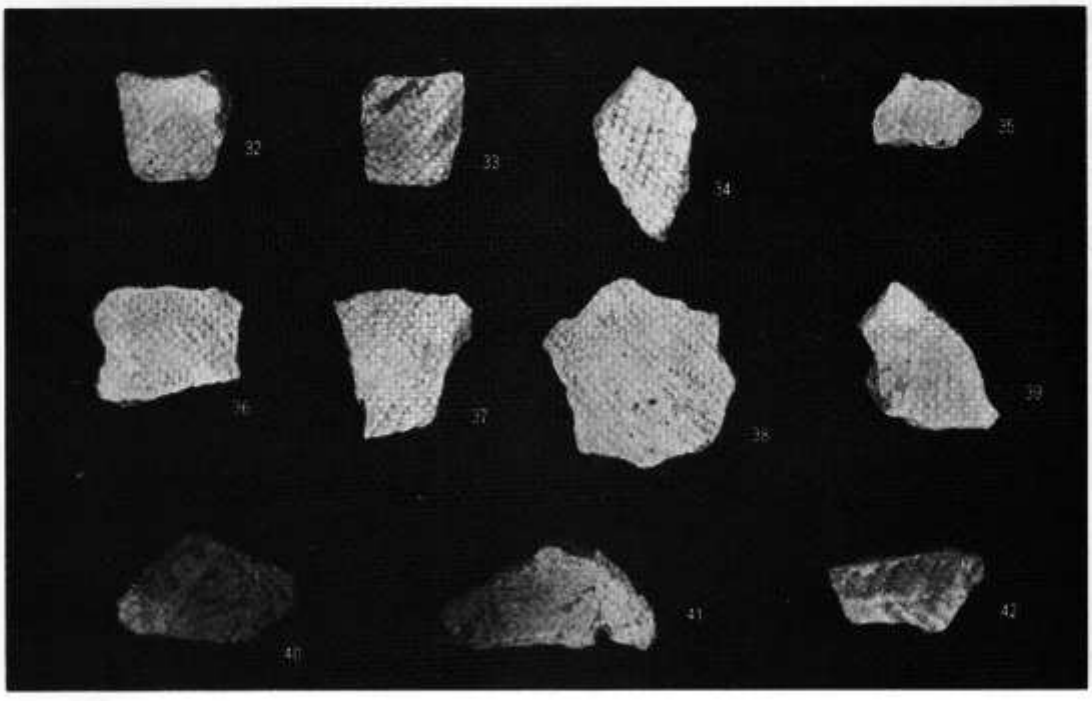
図版16　銭貨・鉄製品



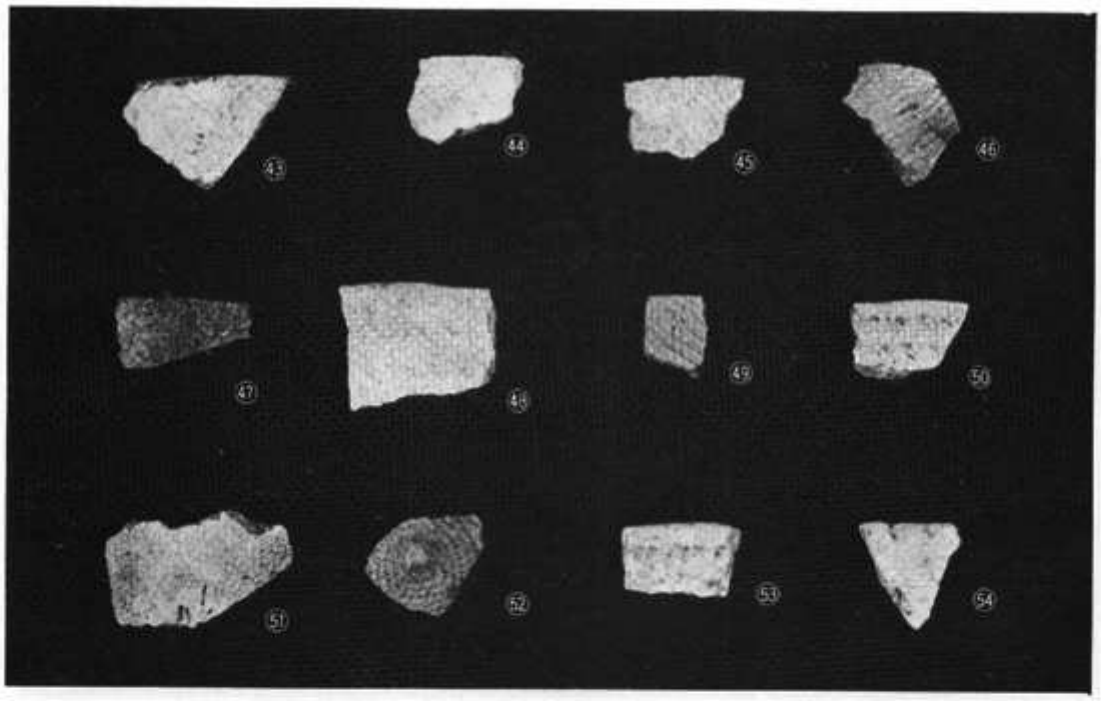


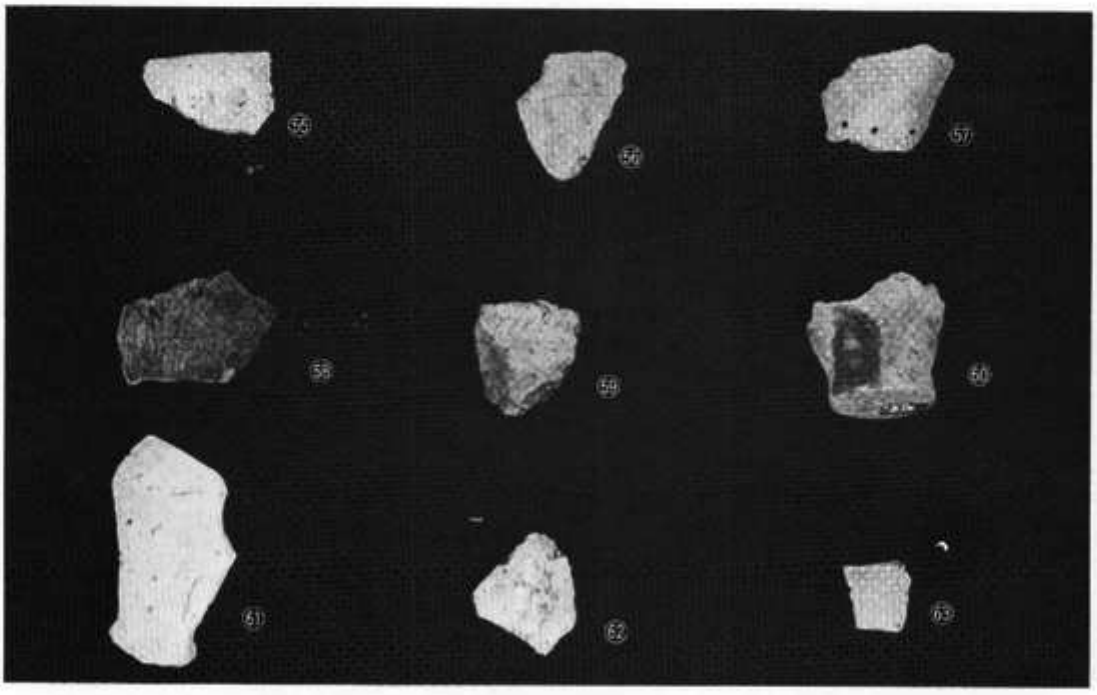
写真図版 6　縄文土器片



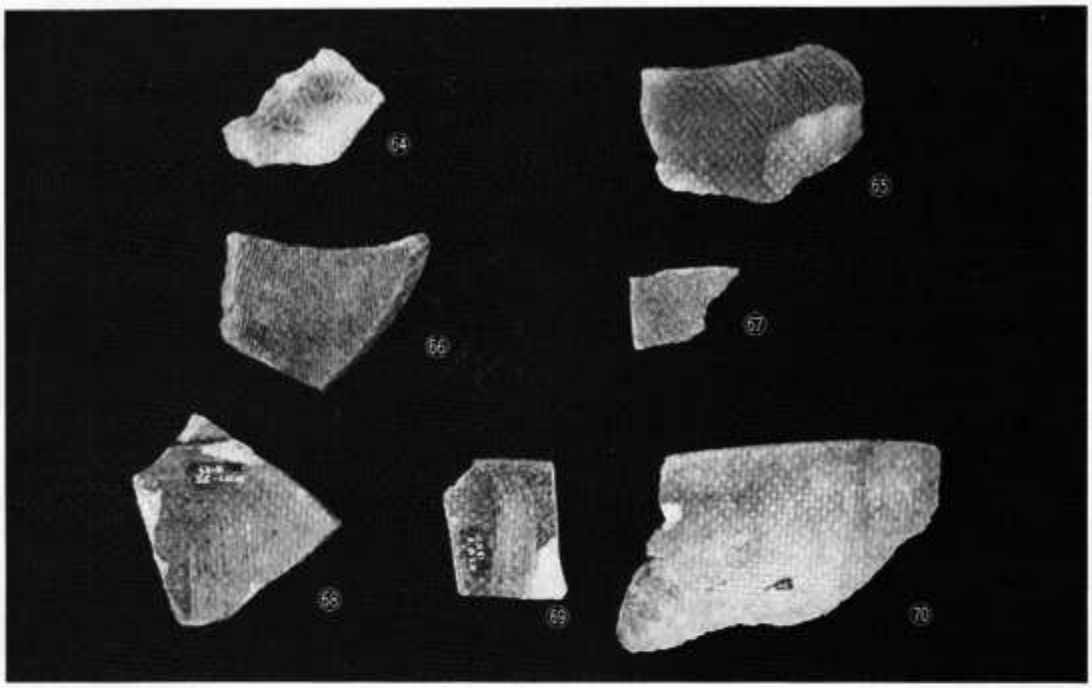


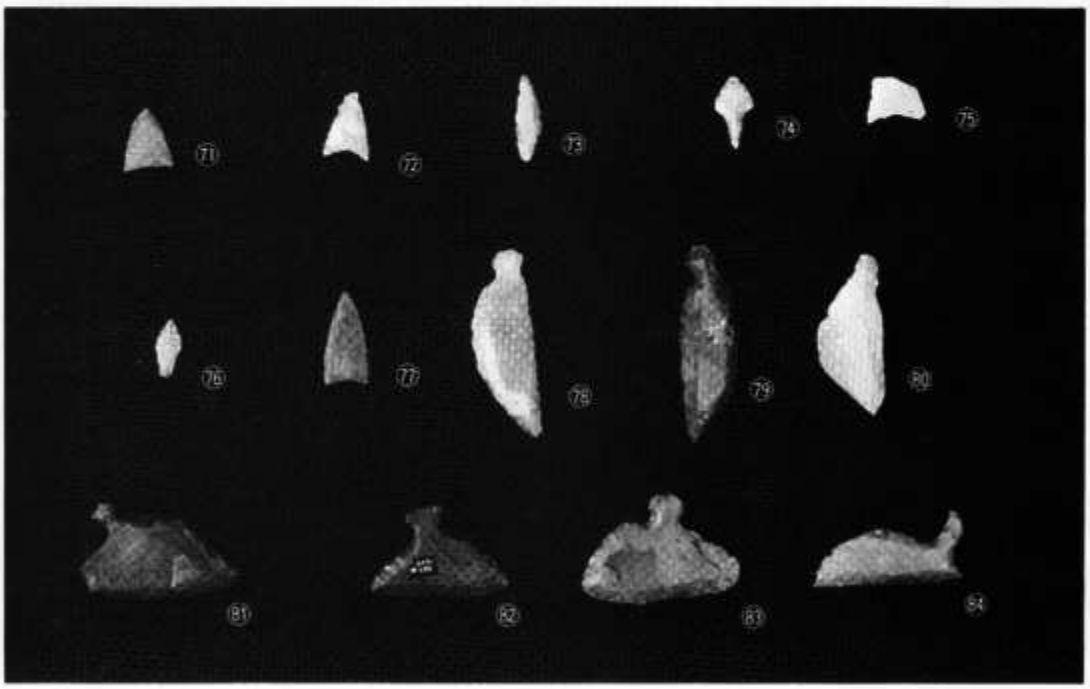
写真図版 7　縄文土器片



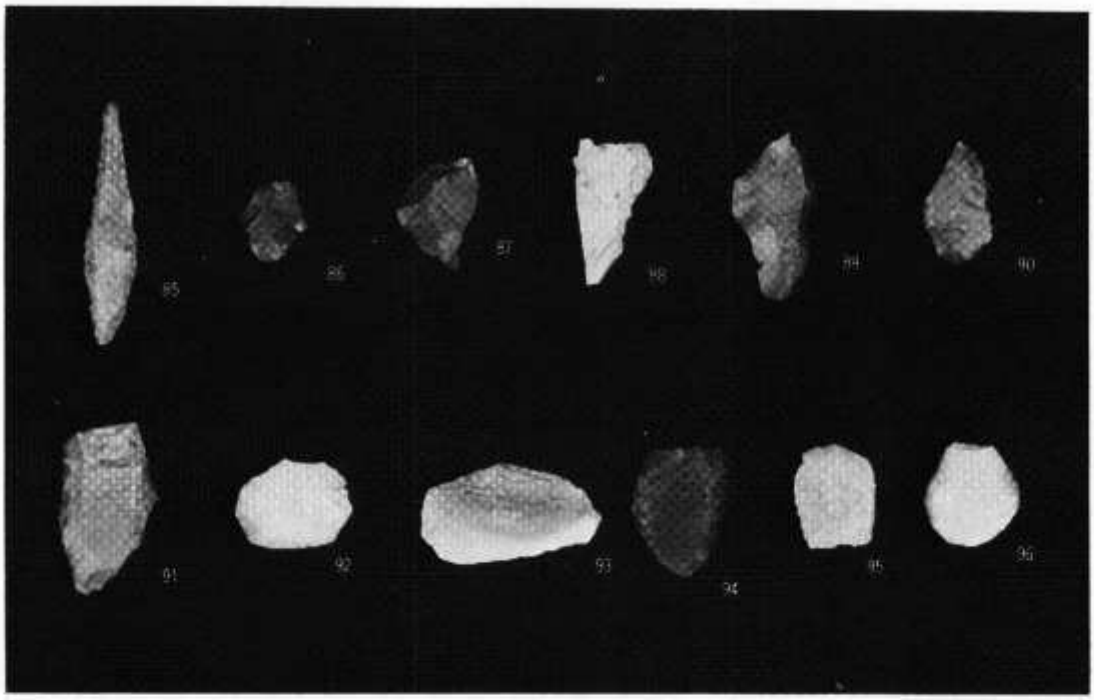


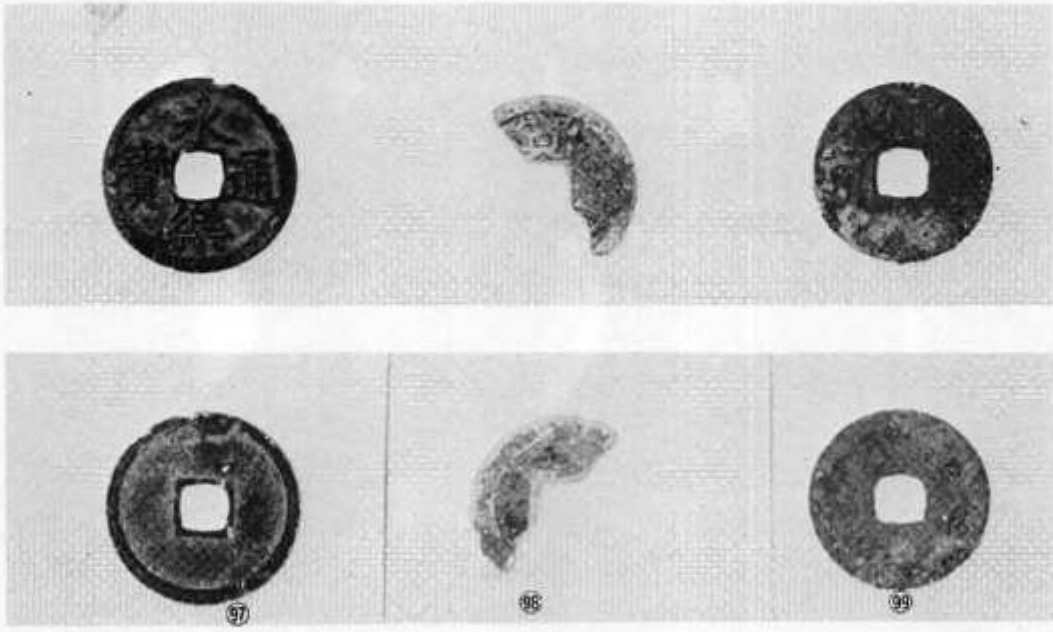
写真図版 8　縄文土器片・土師器片



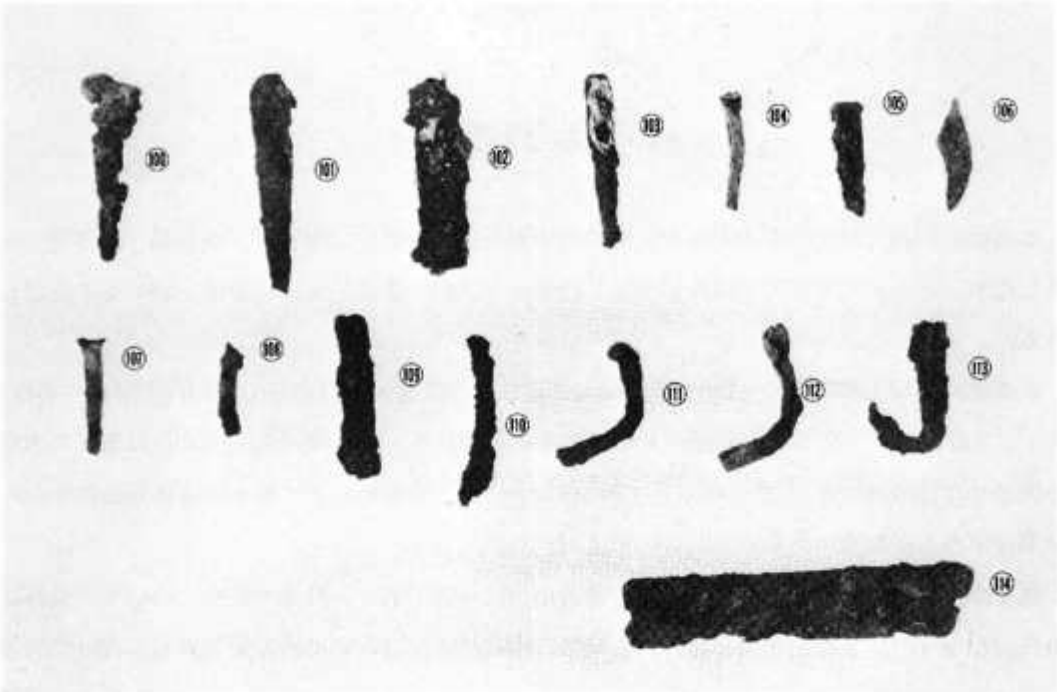


写真図版 9　陶器片・石器





写真図版10　石器・銭貨



写真図版11　鉄製品・鉄滓

V. おわりに

本遺跡から縄文時代早期の土器片、前期の土器片、土師器片、陶器片、鉄製品、鉄滓等が出土したが、とりわけ早期の土器片が出土した事は出土例が少ないだけに価値が高いものと思われる。

本遺跡の早期土器片はC・140竪穴住居址状遺構のすぐ東側の埋没谷の暗褐色土層からの出土で、日計式の押型文土器と同種のものであると思われる。また他の縄文土器片はⅢ区の沢状の凹地やⅣ区の埋没谷の、共に暗褐色土層からの出土で、その殆んどに胎土に植物質繊維を含み早期後半から前期前半のものであると考えられる。

縄文時代の遺構と思われるものからの遺物出土は皆無であり、時期や性格についての資料は得られなかった。また住居址と思われる遺構は構造的条件を欠いている面がある。従って周辺地域にはこの時期の遺跡の存在は考えられるものの、本遺跡をもって縄文時代早期、前期の遺跡とは言い得ないと思われる。

歴史時代の遺構としては馬蹄形周溝、掘立柱建物跡がある。馬蹄形周溝の近くから糸切りの土師器片底部が出土しており、この遺構は古代の遺構と考えられる。掘立柱建物跡は、攪乱や建て替えの痕跡もあり、その細部にわたっての構造は確定し得なかったが、柱穴群の配置から、近世における旧南部藩領を中心に分布し、核心分布地域の一つである遠野地方に存在する南部の曲り家跡と思われる。

参 考 文 献

土地分類基本調査（遠野）　岩手県農地林務部北上山系開発調査室

新岩手風土記　新岩手風土記刊行会　創土社

遠野市史　第一巻　遠野市史編集委員会　萬葉堂書店

岩手百科事典　岩手放送　岩手放送株式会社

考古資料の見方（遺物編）甘粕　健編　粕　書房

考古学ジャーナル36・1969　ニュー・サイエンス社

古代史発掘②　江坂輝彌　講談社

先史時代Ⅰ　芹沢長介　日本評論新社

日本の旧石器　赤澤威・山中一郎・小田静夫　立風書房

岩手県埋文センター文化財調査報告書第七集　岩手県埋文センター

青森県埋蔵文化財調査報告書第30集　青森県教育委員会

日本のコイン　中村佐伝治　保育社

岩手の古民家　東北大学建築学科　岩手県教育委員会

東北の民家　小倉　強　相模書房

日本の民家　今和次郎　相模書房

日本の民家の研究　杉本尚次　ミネルヴァ書房

重要文化財　伊藤家住宅保存修理工事報告書　伊藤喜四郎　文化財建造物保存技術協会

重要文化財　菊池家住宅保存修理工事報告書　岩手県遠野市　文化財建造物保存技術協会

重要文化財　小原家住宅保存修理工事報告書　東和町教委　文化財建造物保存技術協会

岩手県埋文センター文化財調査報告書第43集
寒風遺跡発掘調査報告書

国道283号線道路改良工事関連遺跡発掘調査

昭和57年度3月20日　印刷
昭和57年度3月25日　発行

発行　財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字
下飯岡第11地割字高屋敷185
TEL (0196) 38-9001
印刷　㈱熊谷印刷

© 岩手県埋文センター 1982